

伝えていきたい大切なもの。

第13回

「地域の

伝承文化に 「学ぶ」 コンテスト



個人
団体

地域文化

研究部門

祭り・伝統行事・郷土料理・
方言などの調査研究

個人
団体

地域民話

研究部門

昔話・伝説など
民話の調査研究



学校活動

部門

学校や部、クラスなどの活動として
地域研究活動の実践報告

入賞作品集

主催：國學院大學
高校生新聞社

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

高校生新聞®

第13回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 入賞作品集



平成 29 年 12 月 3 日 表彰式
於 國學院大學

國學院大學
高校生新聞社

学長 赤 井 益 久

「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」は、今回で13回目を迎えます。全国の高等学校の間で定着し、高い評価をいただくようになりました。今回も過去とくらべて遜色のない力作を多数お寄せいただきました。主催校を代表して応募された方々、ご指導を頂きました先生方に厚く御礼申し上げます。また、数多くの応募作を厳正に審査して下さった審査員の先生方にもご協力を感謝申し上げます。

日本の社会は、近代国家の特徴としてその社会構造が、急速な少子高齢化社会に突入し、経済や社会活動自体もその影響を受けるようになっていきます。つまり、大家族が普通だった時代から、核家族化へとすすみ、ついには一人住まいの形態も珍しくなくなりました。社会を形成する一つのまとまりである家族の在り方が大きく変化しています。その家族を取り巻く社会環境も、大きく変わりつつあります。われわれの幼い頃の記憶にある里山や森との共生、地域共同体とも言うべき町村の住人が参加していたお祭り、親戚同様の隣近所の付き合い、屋外での遊び、長老や祖父母の温容と共に記憶にある伝承、その貴重な姿が次第に薄れていく感じがしています。

同時に、平準化しているように見える日本全国の生活基盤においても、なお地域の特色や個性を有し、その地域の不可欠の要素として、むしろ積極的にその伝承文化を守り伝えていかなければならない意識が強まっているようにも見えます。それは古き良きものへの憧憬や懐古という意味だけではなく、むしろ地中深く根付いた芽から吹き出る新たな花のように思われます。われわれは過去に遡って生きていくわけにはいきません。しかし、過去に学びつつ、これからを生きなければ将来を有意義に過ごせません。

変わることに伴う得られる永続性、永続することによって不変を意識できるのかもしれませんが。応募された方々の作品や研究を拝見して、それぞれの地域に生きる伝承文化の大切さを痛感した次第です。

國學院大學は、大学の使命として「伝統と創造」「個性と共生」「地域性と国際性」におけるそれぞれの調和を掲げています。文学と民俗に新たな地平を開いた折口信夫、神道考古学を開拓した大場磐雄、考古学と民俗学を融合した樋口清之などの学者を輩出しています。皆さんの中から、大学に進み伝承文化を培った歴史や文学、考古学などを深めてみたいという方々が誕生することを大いに期待しています。

最後に、コンテスト開催にあたり、ご後援・ご協賛いただきました文部科学省、農林水産省、全国高等学校長協会、全国高等学校文化連盟、國學院大學若木育成会、國學院大學院友会、國學院大學北海道短期大学部及び関係各位に心より感謝申し上げます。

目 次

巻頭言	國學院大學 学長 赤井 益久	
総評	國學院大學 教授 小川 直之	1
地域文化研究部門（団体）	優 秀 賞	明治通りの調査 東京都立戸山高等学校 地理歴史部 3
	優 秀 賞	今年も祖父江の虫送りを追って～杏和高校 4年目の参加～ 愛知県立杏和高等学校 郷土研究チーム 4
	佳 作	ふるさとの川の恵み～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～ 岐阜県立益田清風高等学校 社会探究 5
	佳 作	諏訪信仰について 東京・香蘭女学校高等科 諏訪信仰 6
	佳 作	人形浄瑠璃公演活動をととして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する 徳島県立那賀高等学校 人形浄瑠璃部 7
地域文化研究部門（個人）	優 秀 賞	ダンスで笑顔溢れる地域へ～テーマパークバレーの魅力を地域活性化運動に取り入れる～ 東京・東京大学教育学部附属中等教育学校 高橋 理歩 8
	優 秀 賞	漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～ 愛知県立杏和高等学校 飯田 真世 9
	佳 作	雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ 東京・明治学院高等学校 山本 明香里 10
	佳 作	農家について本当に知ってる？～秋田県横手市の農家の生活について～ 東京・大妻多摩高等学校 川嶋 みずか 11
地域文化研究部門選評	國學院大學 教授 新谷 尚紀	12
	国立歴史民俗博物館 名誉教授 常光 徹	15
地域民話研究部門（団体）	最優秀賞・折口信夫賞	日本の心、地域の文化を伝えるために 群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校 パソコン部 17
	優 秀 賞	佐野の舟橋・佐野の渡しの伝説 群馬・高崎商科大学附属高等学校 社会部進学女子2年 18
	優 秀 賞	下小鳥町の首塚伝承 群馬・高崎商科大学附属高等学校 文芸部 19
	佳 作	民話「川上へ流れた仁王さま」の世界 岐阜県立益田清風高等学校 地域研究 20

地域民話研究部門（個人）	最優秀賞	川との死闘～与三と人柱観音像にこめられた思い～ 愛知県立杏和高等学校 坂東 壮一郎	21
	優秀賞	東京・町田市における妖怪伝説 東京・和光高等学校 木原 愛理	22
	優秀賞	チンチン山考 愛知県立時習館高等学校 仲川 晴斐	23
	佳作	豊川市の昔話 愛知県立豊丘高等学校 鈴木 彩水	24
	佳作	愛知県弥富市「おみよしの松」 愛知県立杏和高等学校 蓑島 千東	25
地域民話研究部門選評		國學院大學 教授 花部 英雄	26
学校活動部門	優秀賞	為朝外伝～東峰村で発見した母の墓～ 福岡県立朝倉高等学校 史学部	29
	優秀賞	堺大空襲とは 大阪府立三国丘高等学校 放送研究会	30
学校活動部門選評		國學院大學 教授 高橋 大助	31
		國學院大學 准教授 飯倉 義之	31
第13回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト受賞者一覧			32
後記			33

第13回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト総評

國學院大學教授 小川 直之

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの趣旨

このコンテストの趣旨は、高校生が自主的に、自分が住む地域あるいは通学する高等学校の所在地域などに伝わる「伝承文化」に目をむけ、その内容を実際に調べたり、体験的に修得したりしながらまとめることで、地域文化がもつ意味を改めて考え、学ぶ。そして、その成果を評価することで、活動の質的向上と活性化をはかることにある。

平成17年度が第1回コンテストで、平成29年度は第13回目となった。大学でのこうした取り組みの後援といえば、教育行政を担当する文部科学省ということになり、第2回目からは文科省後援をいただいているが、第1回の後援は農林水産省にお願いした。これは日本の農山漁村には長い歴史をもつ伝承文化が多く継承されているからで、高校生たちがこうした文化に関心をもち、調べてまとめる活動は、農山漁村の振興、活性化にもつながると考えたからである。こうした意図ももつコンテストの背後には、地域社会の少子高齢化の進行があることはいまでもなく、コンテスト開始時点では少子高齢化や過疎化という社会状況が各地に目に見えるかたちで現れていた。現在は、このことはさらに深刻な問題となっている。

國學院大學がこの取り組みを行う理由

「地域の伝承文化」というのは、日常の生活のなかで、食文化や生活様式、行事や祭り・芸能、伝説や昔話、言葉などとして受け継がれているものである。こうした内容は、いわば大地に根づく地域文化であり、それは「伝承」という継承方式によって存在している。國學院大學は、かつて柳田國男や折口信夫といった民俗学の創始者といえる人物が教授を務めており、卒業生には多くの民俗研究者、地域文化研究者がいるし、文学部日本文学科には「伝承文学コース」が設けられている。伝承文学コースと、「文学」の名が附されているのは、折口信夫の民俗学に基づいており、実質は民俗学のコースである。

大学は、こうした学問伝統を受け継ぐだけでなく、高校生たちの教科外の地域研究、地域文化の再評価にも寄与したいと考えてのことである。大学が行う社会

貢献の活動として地域の伝承文化に特化した取り組みは、他大学に例がなく、まさに國學院大學の学統にもとづく活動といえることができる。

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの概要と応募状況

コンテストは國學院大學と高校生新聞社が主催し、現在は農林水産省・文部科学省・全国高等学校文化連盟その他の後援により実施され、第1回から今回の第13回までの応募状況は表（次頁）のようになる。近年は500から600件の応募があり、応募者は北海道から沖縄県まで全国にわたっている。応募は個人活動の成果だけではなく、高等学校によっては、生徒の夏休み中の地域研究と位置づけたり、郷土研究部・放送部などの課外活動として取り組まれたりしている。

高校生たちの取り組みをコンテストとして行うのは、その取り組みと努力を評価し、顕彰することによってその斬新性と精緻さ・適確さの向上をはかりたいという意図である。扱う内容を祭・伝統行事・郷土料理・方言などの調査研究を行う「地域文化研究部門」、昔話・伝説など民話の調査研究を行う「地域民話研究部門」、学校や学内の部活などによる組織的な取り組みのシステムを構築したり、教科教育とは異なる特色ある成果をあげたりしていることによる「学校活動部門」の3部門に分けている。「地域文化研究部門」「地域民話研究部門」では、団体・個人別に最優秀（1）・優秀（2）・佳作（2）・入選（5）の各賞（括弧内は対象数）を選定し、各部門最優秀賞の中から1点を「折口信夫賞」としている。「学校活動部門」では、すぐれた取り組みと成果による優秀学校賞（2）を設けている。

平成29年度の第13回コンテストは、7月3日から公募を始め、9月11日（消印有効）に締め切り、全国の57校から総数として709件の応募があった。コンテストの広報は、要綱を大学と高校生新聞社がウェブ上に公開するとともに、チラシなどを作成して配布している。高校生新聞社は全国の高等学校とさまざまなつながりをもっており、高校生新聞社からの高等学校への個別広報も行われている。

作品応募は、「地域文化研究部門」は団体21件・個人460件、「地域民話研究部門」は団体12件・個人

194 件、「学校活動部門」22 件であった。応募者の高等学校所在地は北海道から沖縄県まで全国にわたっている。団体による応募数が少ないのが残念だが、表でわかるように、第 13 回は、高等学校数は第 12 回とほぼ同じだが作品数は今まででもっとも多かった。

第 1 回から 13 回までの応募状況

回	年 度	応募件数	応募校数
第 1 回	平成 17 年	133 件	33 校
第 2 回	平成 18 年	244 件	30 校
第 3 回	平成 19 年	85 件	38 校
第 4 回	平成 20 年	153 件	38 校
第 5 回	平成 21 年	417 件	36 校
第 6 回	平成 22 年	474 件	41 校
第 7 回	平成 23 年	318 件	45 校
第 8 回	平成 24 年	650 件	36 校
第 9 回	平成 25 年	538 件	35 校
第 10 回	平成 26 年	620 件	45 校
第 11 回	平成 27 年	640 件	47 校
第 12 回	平成 28 年	628 件	57 校
第 13 回	平成 29 年	709 件	57 校

地域研究の方法と評価基準

このコンテストの意義は、高校生が地域の文化や歴史に目を向け、その中から「伝承文化」を発見すること、そして課題を明確にし、課題について自らが調査研究を行うことで、その実態と問題点を見出して考察すること、さらに収集した情報や資料をまとめ、論理立てをおこなった結果を成果としてまとめることにある。分野はさまざまであっても、大学生が卒業論文や研究レポートを作成する手順とまったく同じである。

地域の伝承文化を対象として、地域社会の過去や現在を、自分の足と手、目と耳で捉えて欲しいというのが主催者の願いである。インターネットなどウェブ上には多くの情報があって、手軽に地域文化情報も入手できる時代となっている。ここからのコピー＆ペーストによって、簡単にレポートが作成できるが、主催者としては、コンテストではウェブ情報はあくまで検索段階のもので、自らが地域の伝承文化の現場に足を運び、これを担っている方々と交流を行いながら、オリジナルなりポートをまとめることが重要である。このことは今までのコンテスト総評で常に主張しているこ

とである。「地域文化研究部門」「地域民話研究部門」の審査基準はここにある。ウェブ上の情報を切り貼した作品は、一次審査の段階で除外される。

自らの目や耳で対象と向き合った調査とそのまとめの過程で、何を考え、どのような結論を得ることができ、さらに新たにどのような問題が発見できているかが、審査の要点となる。

調べた結果を羅列するだけではなく、たとえばその伝承文化の継承がどのような現実と直面しているのかとか、どのような歴史をもって現在に至っているのか、地域で伝承文化を継承している方々は、その文化をどのように考えて伝えているのかなどは、すぐに課題として浮かびあがってこよう。さらに研究を進めるなら、対象とする伝承文化が日本全体のなかでどのように位置づけられるかなど、問題は際限なく存在するといえる。地域の伝承文化を他者として対象化し、そのありさまを捉え、分析するという態度だけでなく、地域の伝承文化を体験的に学び、自己のものとするという態度での研究についても、このコンテストでは積極的に評価している。

学校部門賞では、組織的な取り組みによって、これを行った生徒たちの地域に対する見方がこのように変化したとか、協力しながら課題に取り組むことによって、生徒たちの共同や連携のあり方がどのように変わったなど、取り組みに対する自己評価が重要となる。この部門を設けて今回で 3 年目となるが、こうした意図の浸透には時間がかかりそうだというのが実態で、応募者は意図をよく理解して欲しい。なお、自己評価については、地域文化研究や地域民話研究でも同じで、自分の研究を自ら評価することで、次の一步を踏み出すことができる。

各部門の選評は別途記されるので、ここでは折口信夫賞に触れておくと、この作品は地域民話研究部門の団体で最優秀賞に選ばれている。折口信夫賞は最優秀賞からの選定であり、これに決定したのは、みなかみ町を訪れた海外からの観光客にアンケート調査をし、その結果から地域に伝承される民話を選び、それを英文化した絵本を作成しただけでなく、電子書籍化という方法をつかって周知化を進めたことによる。この活動を自己評価するところまでは到達していないが、成果の社会化という点は評価できる。

優秀賞

地域文化研究部門（団体）

明治通りの調査

東京都立戸山高等学校

地理歴史部

（黒石憩、田頭尚大、堺田樹、遠藤浩明、本間裕洋、清水邦彦、山西創太）

応募の動機

私達は、最も身近な地域「東京」の過去・現在・未来を探るため、本校の目の前を通る『明治通り』の交通状況、沿線の建造物や歴史などを調査しました。そして、これらの要素が政治・経済都市「東京」の形成・発展へ密接に関わっていることを実感しました。この成果をより多くの人に伝えたいと考え、応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

『明治通り』の最端は「夢の島」である。五輪を控える湾岸地域を北上すると、新東京郵便局や複数の鉄道車両基地が存在し、東日本の物流の重要な拠点としての立場が窺える。道路の僅かな高低に、地盤沈下に対抗する大正期の努力を感じつつ、江戸期開削の仙台堀川や小名木川の名残に江戸の商業発展を思わせ、幹線は亀戸駅を越える。

この地域では近現代の産業発展での活躍がセイコーミュージアムなどに窺うことができ、平安末期の開拓で鎮守された小村井香取神社もある。また、かつて明治の著名人が屋敷を連ねたという風光明媚な白髭橋付近を過ると、千住に入って隅田川を渡る。

この地域は隅田川駅や目黒不動などの東北とのつながりを感じる建物が多い一方、江戸期に小塚原刑場があった縁で木賃宿街「山谷」が形成され、刑死者や貧民層を収める寺社も多い。武家屋敷が占めた日光街道以西において、北部は田端機工街として戦時や高度経済成長を支え、南部は近現代の著名な文士が移り住み、田端文士村として栄えた。

隅田川の水運の名残を感じさせながら、交通量の多い幹線は王子へと向かい、急勾配を登って飛鳥山に着く。飛鳥山公園は徳川吉宗が植えた桜の名所であり、春は花見で混雑する。また、飛鳥山三つの博物館と呼ばれる、北区飛鳥山博物館、紙の博物館、渋谷博物館がある。

ここから幹線は南下し、中山道（白山通り）や首都高と交差すると、関東大震災を機に整備された池袋繁華街を通る。この辺りから都電荒川線や副都心線と並走し、戦前建造の千登世橋をくぐる。神田川を渡り、高田馬場の繁華街を西に見ながら、早稲田大学理工学部や我らが戸山高校の前を通ると、幹線は新宿へ向かう。

新宿駅付近の地域には、新宿の総鎮守である花園稲荷神社や、江戸城裏鬼門を鎮護した天龍寺などと、江戸期の内藤新宿に関わる建物も多い。明治期には多くの人に親しまれている新宿御苑（旧新宿植物御苑）が整備され、東郷平八郎を祀る東郷神社も作られた。

木造駅舎の原宿駅に近づくと、世界からも高い評価を受ける壮大な明治神宮の森が望まれる。ハチ公の最期が発見された渋谷駅辺りから幹線は東に曲がり、広尾の武家屋敷跡地付近には多くの大使館が立ち並ぶ。幹線は古川に沿って進み、かつて多くの都電が行き交っていた交通の要所であり『明治通り』の起点「古川橋」に着く。

今後の課題として、調査メンバーを増やし様々な視点から調査することが挙げられるだろう。33.3kmの『明治通り』を調査するにあたり、メンバーが多いほど、それぞれの得意とする分野が集結し、研究に厚みを持たせられるとともに、メンバー間での相互刺激も活発化する。量・種類から多様性を確保することにより、この研究に更なる発展を与えられるだろう。今回の入賞をきっかけに、これまでに以上に地理歴史的分野を強め、専門的な研究を行っていききたい。



明治通り沿いには私たちが通う戸山高校がある。写真は明治通りを調査する部員の様子。



溝田橋交差点で明治通りは写真手前から左側へ曲がる。歩道橋の形が下から見るとXの形をしていて、ユニークで面白い。



あらかわ遊園はレンガ工場だったこの土地に着目した王子電気軌道株式会社が、大正11年5月1日に開園した。今では、都区内唯一の公営遊園地となり、アトラクションやどうぶつ広場や釣り堀などがある。

今年も祖父江の虫送りを追って

～杏和高校 4年目の参加～

愛知県立杏和高等学校

郷土研究チーム

（澤井翔太、早川侑那、山口唯月、木村美穂、坂東壮一郎、飯田真世、
 蓑島千東、伊藤響、大島将義、加藤亜矢、金森絢香、河野美里、佐藤愛奈、
 佐藤陽葉里、沢田茉優、菖蒲志保、高松誠、立松真実、今枝香帆）

応募の動機

日本史の授業で先生から「虫送りに参加して体験をまとめてみないか」、「地域行事に関わることはいい経験になり、先輩たちもこの3年関わってきた。関わる人が変わっても杏和高校として継続することは大切」と言われました。ちょうどこの時期に源平合戦について学んでおり、そこに登場する武将である斎藤実盛と今回調べた「虫送り」が密接に関係しているということもあり、今回のコンテストへの応募に至りました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちの高校は愛知県稲沢市の旧祖父江町にあります。そこで行われ、愛知県の無形民俗文化財になっているのが祖父江の虫送りです。平氏の武将の斎藤実盛が稲に足を取られて倒れたところを、殺されたことから怨霊となって農民を困らせました。この実盛の怨霊を鎮めることで虫を追い払い豊作を祈るのが「虫送り」です。今回2年生19人が集まり、以下のことについて取り組みました。

1) 稲沢市祖父江町の虫送りへの参加

人形・松明作りを行う一部と、虫送りを行う二部とに分かれています。実盛人形と松明の作り方にも昔からの方法があり、私たちはそれを地域の方たちから教えていただきながら作業を行いました。それと同時に、地域の方たちの虫送りへの想い、虫送りの今後など、切実な生の声もお聞きすることができました。二部では実際に火をつけた松明をみんなで協力して担ぎ、実盛人形を先頭に田の周りを練り歩き、当時の農民の気持ちを考えました。研究チームのメンバーそれぞれが感じたこともまとめました。

2) 他地域の虫祭・虫送りについて

一宮市尾西民俗資料館の学芸員の奥野絵美さんから尾西（一宮市の最南端、稲沢市祖父江町のすぐ北の地域）の玉野の虫祭と、その翌週に行われる一宮市阿古井周辺の虫祭を紹介していただき、実際に見学させていただきました。「農家が減ったこともあって年々簡素化が進んでいる」という地域の方のお話から、地域の方の想いを感じることができました。

3) 市史・町史・村史の中の虫送り（文献調査）

虫送りについて、私たちが通学しているこの尾張西部ではどう行われていたかを知るために、近隣の図書館で調べました。そこで得た情報を地域ごとの違いがわかりやすいように表にまとめてみました。この調査の結果、虫送りがかつては尾張西部全域で行われていたことが確認できました。しかし、地域によって虫送りの方法が微妙に異なっていることが分かりました。ここでは以下の3項を示します。

① 虫送りの特徴

虫送りの内容は大きく分類すると、3つに分けられます

A: 実盛人形等を先頭に松明に火を灯し行列し、祭りの最後に松明と共に火に投じる。

B: 実盛人形等を用いて行列するが、松明など火は使用しない。

C: 実盛人形は登場せず、御幣やお札を各々の田に立てる。

全体的に実盛人形や松明などを用いて、最後火に投じる場合が多いです。しかし、南へ下っていくにつれて、津島神社の強い影響を受け、津島神社からのお祓いをうけたお札を虫送りに用いたり、場所によっては火を使わないという傾向がみられました。

② 虫送りの「歌」の違い

多くの虫送りには「歌（お囃子）」があります。今回は北から南へ順番に並べて比べました。各地で微妙な違いがありました。

③ 虫送りの呼称の違い

「虫送り」という呼称とは別に、それぞれの地域に古くから伝わる呼称があることが分かりました。例：稲沢では「おんか」または「豊熟祭」。

この文献調査をして、改めて昔からある虫送りが、祖父江の地に今でもほぼそのままの形で残っていることは、本当に貴重ですごいことだと実感することができました。

今回の虫送りへの参加を機に、さらに祖父江やその周辺地域の虫送りについて深く関わり、地域の方たちとのつながりを大切にして、今回の調査でわからなかった虫送りの詳細をさらに調べていくことが今後の課題です。また、今年は参加できなかった常滑の虫送りにも来年はぜひ参加して、地域ごとの違いをもう一度比べて、虫送りについての考えを深めていきたいと思います。



行列の後、松明を投げ入れる



松明の作り方を習う

ふるさとの川の恵み

～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～

岐阜県立益田清風高等学校

社会探究

（新井未緒、奥田伶奈、蒲隆成、鎌倉菜摘、小林礼奈、忍由希奈、立道結佳、中田恋、長塚竜我、荒木美有、奥野節音、日下部乃愛、小山未紗衣、二村聖菜、細江侑以、松森遥香、湯山千春）

応募の動機

私たちの学校は、地域社会とのつながりを大切にしたい取り組みを行っており、このコンテストに向けた作品作りはその一環です。毎回地域の人たちとの交流やフィールドワークを通じて、地元にある新しい魅力を発見してきました。そこで今年は地元の「益田川」をテーマにした作品を作り、新たな魅力を探っていこうと考えました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちは、次の三項目に分けて調査、フィールドワーク、インタビューなどを行い、レポートにまとめました。

1. 益田川について

益田川は、御嶽山や乗鞍山を水源として旧益田郡沿いを流れる自然豊かな清流で、正式名称を飛騨川といいます。非常にきれいな川で、鮎やアマゴ、アジメドジョウなど、きれいでおいしい魚がたくさん生息しています。昔から地域の人たちは、この豊かな川の幸を使い、朴葉ずしなどの郷土料理を作ってきました。朴葉ずし以外にも、甘露煮やてんぷら、イワナの骨酒など、豊かな川の幸を用いた特産品が多いです。また、食文化だけでなく、観光面に目を向けると、益田川の支流には滝が多くあり、滝めぐりを楽しむことができます。さらに、水量が多いため各所にダムや発電所が建設されて私たちに電気を供給してくれています。このように、現在の私たちの暮らしに密接にかかわる川が益田川です。



朴葉ずし用の鱒の養殖場跡

2. 益田川の歴史

飛騨地方は古代から、豊富な山林資源の故に中央政府から注目されてきました。良質な木材と高い技術を持った職人（飛騨の匠）は、税金の代わりとして都市に送られました。税金として中央政府にわたる木材を流すために使われたのが益田川でした。私たちの祖先は、上流から切り出された材木を傷つけないように上手く下流へと流す「川狩り」という仕事をしていました。また、益田川は大洪水を起こす暴れ川としても有名で、学校の近くには洪水の被害から逃れることを願って建てられた塔があったり、洪水にまつわる民話も伝わっています。

3. 地域の方と考える益田川と私たちの暮らし（今後の課題）

フィールドワークなどの活動とともに、益田川に精通しておられる方にお話を伺いました。「岐阜の川人文化研究会」の長尾伴文さんと、全国的に活躍しておられる益田川の釣り師天野勝利さんです。お二人から伝統的な漁具や、そこに込められた先人の工夫、想いを伺い、改めて私たちが住んでいる地域には素晴らしい文化が根付いていると再確認できました。

この素晴らしい文化を将来につなげるためにはどうすればよいのでしょうか。お話を伺ったお二人は、優れた文化を将来に残すべく、商品開発や体験学習の企画などとても活発に活動されています。そんなお二人と交流する中で気づいたことがありました。活動の根底にあるのはふるさとの川への愛情であるということです。ふるさとの川を守り、育て、伝えていくには、まず私たちが魅力を再確認し、その文化をしっかりと守っていく姿勢を忘れてはならないと感じました。その上で、もっと多くの人々に興味を持ってもらい、地域の活性化につなげていきたいと考えています。



イワナ（昭和34年）の魚皮拓（釣った魚の皮をはぎ、天日干したもの）



益田川に鮎の友釣を伝えた山下福太郎制作の山下竿

諏訪信仰について

東京・香蘭女学校高等科
諏訪信仰

（澤村望恵、大上文、大野紗季、大谷佳凜、久保愛実、栗林純伽、佐藤眞子、鈴木恵、高木美礼、竹野桃加、田村未来、野中麻優、松永めい）

応募の動機

高校2年生の時に『古事記』を読むという選択授業をとっていたメンバーを中心に、諏訪にまつわる信仰を調べてみようという先生に誘われました。国譲り神話の最後に諏訪に逃げた「建御名方神」と「諏訪大社」について、諏訪に行ってフィールドワークしたので、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストに応募してみようということになりました。

研究レポート内容紹介

「諏訪大社」は、上社二社と下社二社の四社で構成されています。「諏訪大社」は本殿がないのが特徴（諏訪造）で、古代の様式を残していることがわかります。「諏訪大社」の祭神である「建御名方神」は、『古事記』において大国主神の御子神として紹介されていますが、国譲りの場面では登場しません。また『日本書紀』『出雲国風土記』『出雲国造神賀詞』には「建御名方神」という名すら存在しません。

「建御名方神」が諏訪に侵入した時、「洩矢神」を長とする先住民族が迎えますが、「洩矢神」は敗北、諏訪は「建御名方神」の支配地となり、「建御名方神」の子孫である諏訪氏が大祝という位に就き、「洩矢神」の子孫の守矢氏が神長官という位に就く体制ができました。神長官守矢氏は諏訪に古くからいる「ミシャクジ」という神を、唯一、上げ下ろしできる家で、現当主は78代目です。柳田國男氏は『石神問答』の中で「最も不思議に存ぜられ候一事はシャグジの信仰に候」と語るほど、「ミシャクジ」神についてはほとんど解明されてません。「ミシャグジ」は縄文時代から名前や実体のない、精霊的な存在として崇められ、豊穡などを祈る神として信仰されていたそうです。

諏訪の神にまつわる話としては、南北朝時代の説話集『神道集』『諏訪縁起事』の中に「甲賀三郎伝説」があります。冬の諏訪湖の御神渡りは、一説によると甲賀三郎が契りを結んだ、春日姫のもとに一年、維摩姫のもとに一年と交互に通う道とされています。諏訪湖が氷点下10度前後の日が続くと、氷結した表面の裂け目が山のようにせり上がることで、一本の道筋となって御神渡りとなります。御神渡りが起きない年は「明けの海」と呼ばれます。

「諏訪大社」にまつわるお祭りのうち、御頭祭は、毎年4月酉日に穀物の実りが豊かになるように祈って、「諏訪大社」に祀られている神のお使いが信濃国中を巡回する時に際して行われた祭とされています。以前は上社前宮の十間廊に鹿の頭を75頭、また白兎や鯉など色々な肉の塊が供えられていたそうです。また、御柱祭（正式名称：式年造営御柱大祭）は、山の中から選ばれた16本を御柱とし、それらを山から曳き、境内に建てるという一連の行事で、寅と申の年（6年ごと）に1度行われます。御柱祭の歴史は、記録に残るもので804年桓武天皇の御代からで、信濃国一国をあげて盛大に行われる様になりました。

今後の課題

諏訪に行き、「建御名方神」以外に諏訪の地にもともとあった信仰や神々の存在を知ることが出来たものの、まだ未解決なことが多く、今後、神長官守矢家の方や研究家からお話を伺い、少しずつ謎を解明していきたいです。



御頭御社宮司（ミシャクジ）総社



神長官守矢史料館で田村館長のお話を聞く

人形浄瑠璃公演活動をととして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する

徳島県立那賀高等学校

人形浄瑠璃部

（尾脇嘉彦、浦本一喜、岡部悟子、乃一ゆか、廣田桃果、増田大雅、岡本悠斗）

応募の動機

私たち人形浄瑠璃部は、部活動が設立されてから、地域に古くから残る農村舞台の公演に積極的に参加してきた。その際、単に浄瑠璃を演じるだけではなく、地域における人形浄瑠璃や農村舞台とその役割について学ぶことで、より表情豊かに演じられるのではないかと感じた。阿波人形浄瑠璃への意識を高め、活性化を図ることを目的に応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

徳島県は、農村舞台の残存数が全国一と言われ、その中でも本校のある那賀地域には現在も活発に利用される農村舞台が多く残っている。私たちは、農村舞台での公演活動に積極的に取り組む中で、農村舞台の特性やその役割について体験をもって学んでいる。人形浄瑠璃が最も栄えたと言われる明治中期から昭和中期の実態を知り、それぞれの時代における地域の情勢を理解することにより、後継者不足が課題とされる阿波人形浄瑠璃への意識を向上させ、次世代へ継承するとともに、地域の活性化を図ることを目的に本研究を始めた。

本研究では、公演活動を行いながら、地域の方々からお話を聞くことに加え、農村舞台が残る地域の实地調査、民俗資料館等の訪問、人形浄瑠璃に精通されている方へのインタビュー調査をすすめた。

今回、調査・探究によって知り得たことを、7点に整理した。

- (1) 明治から昭和初期にかけて、徳島県の産業は「藍商」、「林業・木工関係」が最盛であった。
- (2) 吉野川流域では、舞台小屋があり淡路からプロを招き、人形浄瑠璃の公演を有料で開催していた。
- (3) 中山間地では、経済状況の多様化により、一部の資産家が太夫や語り手等に賃金を払い、近隣で浄瑠璃に興味関心のある方を神社の境内等を集め、無料で人形浄瑠璃の公演を開いていた。
- (4) 県内に残る農村舞台は、「88」あると言われ、この数は、日本でも第1位であるが、活用しているものは多くない。
- (5) 県土の約65%を占める本県の中山間地に多い農村舞台は、神社の境内やそれらに付随して増築された建造物が主体となる。増築や修繕にも、多くの材木が必要であり山間地の林業が盛んな地域で活性化された。
- (6) 昭和30年過ぎから、藍商が低迷となりそれに伴い吉野川流域の舞台小屋が姿を消してきた。同時に、木材価格の変動及び後継者（担い手）不足により林業関係産業の衰退に伴い、農村舞台も同様に低迷してきた。
- (7) 徳島県の主要とされてきた産業が低迷し、働き盛りの年代の者が、地域を離れて仕事につく傾向が多くなり、地域伝統文化を継承する人材が居なくなってきた。

以上、7つの要因により、明治から昭和初期にかけて最盛を誇った阿波の伝統文化が低迷してきた。こうした背景を知り理解したうえで、これから私たち人形浄瑠璃部にできることは何か。伝統文化を継承する意義と使命について再確認するとともに、活性化させる必要性や重要性について、前向きに検討し、試行錯誤しながらも、いろいろなことに挑戦し続けたい。



十郎兵衛屋敷館長さんのお話



神山寄居座長さんのお話

ダンスで笑顔溢れる地域へ

～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校 3年
高橋理歩

応募の動機

私は、この研究を卒業研究として取り組んだ。進めていく上で、現在行われている千代田区「社会を明るくする運動」の始まりは、戦後の荒廃した社会の中で犯罪防止のために行われた銀座パレードであることが分かった。このことから、現在の運動が地域の伝承によって続いていることに気づき、より深まった。その中で、このコンテストを見つけ、応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私は以前バトントチームの活動で地域活性化運動の一環で行われているパレードに参加し、ダンスは参加側も観客側も楽しめるものであり地域活性化のいいきっかけになるのではと思った。そこで、「ダンスを用いた地域活性化運動を広め、地域に笑顔を届ける」ことを目的に研究した。また、「運動を広める」ためにテーマパークパレードの特徴を参考にし、新たな運動形態も提案した。

まず、地域活性化とは何を指すのかを明らかにした。それを受けて、地域活性化運動について参加者・観客・主催者の3者の視点から見て、千代田区「社会を明るくする運動」の課題を提示し、これらを改善してより効果的な運動を目指して本研究を進めた。地域活性化の目的は「安心安全で生き生きとした明るく持続的な地域づくり」であり、運動の課題は①観客への意識づけの強化、②ダンサーと観客の距離を縮める、③運動への注目を増やす、の3点である。そして、テーマパークパレードの特長を用いて提案した4つの運動形態の中から、現在の「社会を明るくする運動」のパレードルートに停止点を設け、観客に参加してもらうことを加えた「屋外パレード（途中停止・参加型）」を推薦した。参加型により、観客を「見物人」から「参加者」に変えるテーマパークパレードの特長を用いて、運動に親近感を持ってもらう。また、「地域を笑顔に」という「テーマ性」を取り入れ、ダンサーの意識統一をすることで課題①が改善できる。さらに、テーマパークパレードの特長であった「ダンサーと観客のコミュニケーション」の時間を設け、近い距離での両者の接触を可能にして課題②が改善できる。また、屋外開催でより多くの人の目に触れられ、途中停止型により歩くことが好ましくない高齢者や赤ちゃん連れの方も安心して見られる。これらにより「世代を超えて楽しめる」パレードにし、課題③が改善できる。

以上により、地域活性化には明確な目的があり、ダンスは人を笑顔にして地域を明るくし、人々の繋がりをつくる観客とのコミュニケーション手段であることが分かった。したがって、「ダンスで地域活性化」という運動は効果的であると結論付けられた。しかし、地域活性化運動・テーマパークパレードについて観客側からの意見が聞くことができなかったため、違った視点からの新たな発見もすべく、より多くの方へインタビューすること。この研究結果を実際の地域活性化運動に取り入れてどのような変化が見られるのかを確かめること、を今後の課題とする。



第64回社会を明るくする運動 パレードの様子



ミツバチ（くまのぶーさん）をイメージしたダンサーがゲストとコミュニケーションをとっている様子

漬物は語る ～世界に誇る日本食の起源とは～

愛知県立杏和高等学校 2年
飯田真世

応募の動機

自分の知らないことを知りたい、自分の見たことないものを見たい、という好奇心が今回のコンテストに応募しようと思った一番のきっかけです。題材にする祭りや民話を調べているとき、自分が長く住んでいる地域であるにもかかわらず見聞きしたことがない物が多いことに驚きました。その時、悔しさとともに感じた「今までこの地域のことを私は何も知らずに生きてきたんだ」という何とも言えない感情を私は決して忘れないと思います。その中で、全国で唯一漬物の神様が祀られ漬物に関する祭りも長く行われている萱津神社の香の物祭りを題材に選びました。そして自分の住む地域のことを胸を張って話すことが出来るようにと、研究を進めました。

研究レポート内容紹介

1 資料集め

市の図書館へ行って題材に関することが書かれている本を探したり、資料館へ行って祭りのパンフレットを見せてもらったりしました。古い資料を読み解くことは大変でしたが、様々な人に助けられて当時の神社や祭りに関することを深く学ぶことが出来ました。何も知らないところからのスタートだったので、一つ疑問が浮かぶとそれに連なるようにいくつもの疑問が浮かんできて、時間が足りないと思うほどでした。

2 関係者への聞き取り

祭りの行われている萱津神社の宮司と神職に話を聞くことが出来ました。宮司と話した際は1時間以上に及ぶインタビューの中で、資料を読むだけではわからなかった受け継がれてきた思いを聞くことが出来ました。貴重な文献や写真を見せていただき、実際に生の声として神社や祭りに関する意見を聞くことで、確かに歴史はここに今も流れているんだと肌で感じる事が出来ました。

3 祭りへの参加

初めて参加した香の物祭りは、想像していた通りの小さな小さな地元のお祭りでした。しかし、その中には他県から来ている方や外国人の姿も見えました。俳句の会で「香の物祭り」がお題に出たため、メンバーのみんなで来たという方々もいました。いろいろな方と話していく中で、皆香の物祭りを地域の誇りであると強く感じていることが伝わってきました。実際に漬物を作る工程(漬け込み神事)にも参加しました。多くの野菜を最後まで人の手で甕の中に漬けていく作業は、地域の子供たちにとってはとても楽しいようで何度も何度も並んでは野菜を手に取り甕の中に入れていました。とても微笑ましく、今の楽しいがいつか受け継いでいきたいに変わってくれることを心の中で祈りました。



漬け込み神事で漬け物をする私



地域から奉納された野菜

今後の課題

今回の研究を通し、一步を踏み出すことで自分が今まで見たことのない世界を見ることが出来るんだと知りました。何事にもチャレンジし前向きに考えていく力がついたと自分でも感じています。研究の中では香の物祭りに参加するところで終わってしまっていますが、その後漬物を熱田神宮に奉納するところまで追いかけて調査を進めていけたらいいなと思っています。たくさんの人に支えられて完成できたこの研究ですが、ここで終わってしまうのではなく今この場所をスタートとして、支えてくださった方々に恩返しできるような地域活動をしていきたいと思っています。ありがとうございました。御馳走様でした。

雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ

東京・明治学院高等学校 3年
山本 明香里

応募の動機

アメリカへ交換留学し、現地で日本の伝承文化について紹介したときに自分の無知を再確認しました。日本に帰国後、幼少期から参加している御会式について深く調べたいと思ったのがきっかけです。高校生活の締めくくりに応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

東京都の池袋の大都会のとなりに雑司が谷という静かな街があります。そんな雑司が谷の御会式に私は幼少期から毎年参加してきました。御会式はもともと、日蓮聖人の供養のために行われてきました。また、雑司が谷の御会式は毎年10月16日から三日間おこなわれます。太鼓を叩き、纏を振りながら万灯行列が街の中を進みます。万灯行列は、講社という集団から成っていて、講社はその地域の人々で構成されているもの、同級生や仲の良い人たちが構成されているものなど様々です。最近では豊島区指定の重要文化財に指定され、宗教行事というよりも、地域の一大行事という位置付けが強くなってきています。御会式は、その時代に合わせて形を変えています。私がまだ生まれていないときの御会式と今の御会式では、参加者の数、様子共に大きく違うことに気づきました。さらに、引っ越してしまった人もこの日は雑司が谷に戻ってきて共に御会式参加する、という光景がよく見られます。また、御会式の準備や纏の練習のために地域の大人と小学生などが交流する場が多いです。豊島区立南池袋小学校では、休み時間に纏を貸し出して先生や上級生が纏の振り方を教えたり、太鼓のリズムを教えたりしています。さらに、南池袋小学校では、御会式当日に先生方や児童たちが集まり、燈友会という講社で参加するなど、積極的に地域の文化についての教育をすすめています。その意味で御会式は「人と人をつなぐ」という大切な役割を果たしています。

今後の課題としては、まず後継者問題が挙げられます。講社の長である講元は高齢になっている傾向があり、纏の指導者も高齢化しています。また、最近では見物客が増加傾向にありますが、それに伴い安全面の心配もでてきています。1番大切なのは、これからの御会式を伝承していく私たちが御会式についての正しい知識を持ち、時代の変化に対応しながらその素晴らしさを後世に引き継いでいくことです。



池袋の街と万灯



一昨年の参加の様子

農家について本当に知ってる？

～秋田県横手市の農家の生活について～

東京・大妻多摩高等学校 1年

川 嶋 みずか

応募の動機

私が在学している高校は中高一貫校なので、高校受験がない代わりに中学3年時に卒業論文を課せられていました。私は、『～農業について～ わたし、農家継ぎます！』という自分が農家になったことを仮定し、どうしたら農家は儲かるかについての論文を書き、学内最優秀賞をいただきました。このことで、秋田県横手市の地域の特色に興味を持ち今回のコンテストに応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私の祖母の兄（論文中では本当は大叔父なのですが私の感覚上、曾祖父と書いています）は秋田県横手市で「あきたこまち」という品種の米を作っている米農家です。この論文を書こうと思った時、せっかく親族に米農家がいるのだから書物を調べて書く論文ではなく、私のいる環境だからこそ書ける論文を書くというのが私の目標でした。そのため、今回の論文では皆さんが知っているような名産品（きりたんぽなど）に視点を置くというよりは日常生活でよく食べられているものや親族がいるからこそ分かる行事のしきたりに視点をあて、書きました。例えば、味噌。私は今、祖母の姉の手作り味噌を食べています。この味がはっきりした味噌を生まれたときから食べているので、家庭科の調理実習で食べる市販の味噌がおいしいとは思えません。また、行事で言うとお盆。東京では送り火を焚いたりする家は減多にないのでお盆＝休みという感覚が強いと思いますが、秋田県ではお盆の準備は早朝から始まったりと、私たちが何気なく食べているもの・いつの間にか過ぎている行事でも受け取り方に大きな違いがあります。自分の暮らしがこうだから、どこも同じ感じでしょ？という考えをもう一度考え直せるような論文になるよう心掛けました。今後の課題としては、人に読みやすい論文を書き続け、その読んだ人に「へえ、そうなんだ。面白い！」と思ってもらえるような論文に、そしてもっと内容を膨らませられるように自分の個性が論文から滲みだしてくるような論文が書けるように努力していきたいです。

最後に『農家について本当に知ってる？』という論文を評価してくださりありがとうございました。



執筆風景



手作りの味噌

地域文化研究部門選評

國學院大學教授 新谷 尚紀

■総評

高校生の皆さん、若い人たちの研究意欲には、実にたくさんの可能性が秘められています。①疑問を発する力、②調べる力、③分析して結論にまとめる力、その3つこそが貴重な研究の力です。これからもその3つをずっと大切にしてください。ただ、若者の素朴な意欲に対しては、よい指導基準が示されることが大事です。みなさんはその、よい指導基準を示していただける先生方に恵まれて、ほんとうによかったですね。

一般的に研究成果についての評価基準として共通しているのは、専門の研究者の場合でも同じなのですが、以下の5つの点です。1. 問題発見や着想の上での独自性、2. 情報収集の上での直接性や確実性、3. 情報整理の上での論理的工夫や努力の跡、4. 立論の手順における論理の実証性、5. 結論としての新たな知見の明確性、です。このコンテストに参加した高校生のみなさんの場合もこれを基準として読んでみました。1. の問題発見については、入賞作のすべてが身近な問題発見から出発しており、高く評価できました。2. 3. はやはり文献調査と歴史情報の確認を行った上で実際の現地調査と現場情報のていねいな収集ができていのかどうか、という点が重要です。文献調査と民俗調査との両立ができてい場合は評価が高くなります。4. 5. はハイレベルな要求ということになりますが、若い高校生のみなさんと、現場で指導しておられる先生方との熱意が感じられる応募作品が多かったと思います。これからも、上記の1. から5. の評価基準を参考にして、このような実学的な学問探求が若い人たちによって積み重ねられていくと、日本の学問の未来も大きく開けていくにちがいないと思います。

■団体の部

優秀賞

「明治通りの調査」

東京都立戸山高等学校

地理歴史部

明治通りの調査、よくがんばりましたね。自分たちの都立戸山高校の前を通る身近な道路が、そこからどこまで続き、どんな世界へとつながっているのだろう、という発問がまずよいです。渋谷・新宿・池袋を

つなぐ目の前の明治通りが、南は港区から伸びてきた環状道路で、北は王子を経て台東区から江東区の夢の島までつながっているということを知り、さらに都心部からの放射状のそれぞれの幹線道路と交差して、果てしなく広がるルートであることを知ったのですね。高く評価される点を挙げておけば、まず第一に、その取り組みの姿勢です。そして、自分たちの足でその現場に行って調査している点です、夢の島、神宮前交差点、など七つのポイントを集中的に調べてその地理と歴史を追跡している点、三、地図や写真を多く掲載して読む人にわかりやすく伝えようと努力している点、四、出典を明示して参考データの裏付けを明示している点、などです。これからもがんばってください。

優秀賞

「今年も祖父江の虫送りを追って～杏和高校 4年目の参加～」

愛知県立杏和高等学校

郷土研究チーム

祖父江の虫送り行事について、四年続けての調査、よくがんばりましたね。先輩がこれまで調べてきたこともよく学習して、それをふまえながら自分たちの手でしっかりと調査をしている点がまずは評価できます。以下、評価できる点をあげておきます。一、集まった19人が、全員でやること、と、時間的に可能な人がやること、という二つの対応を考え実行している点、これによりしなやかな対応力が磨かれています。二、豊富な写真資料が掲載され、実地調査と聞き取り状況も臨場感があり、優れた調査データが得られている点、三、参加者19名がそれぞれ自分の現場体験をリアルに描きとどめている点、四、地元の資料館の学芸員の方のアドバイスを受けて一宮市の玉野や阿古井など近隣の虫送り行事についても調査している点、そして図書館で尾西地区の計14の虫送り行事に関する自治体史の調査情報を収集している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「ふるさとの川の恵み～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～」

岐阜県立益田清風高等学校

社会探究

地域密着の調査で地元の益田川のことをよく調べています。評価できる点をあげておきましょう。一、川人文化研究会の長尾さんから貴重な話を聞いている点、何よりも経験豊かな伝承者から直接教わるのが

大切です。二、その長尾さんからの聞き取りで、鮎の友釣りという漁法がもともとこの岐阜県下にはなかったということ、この地域の友釣り漁法を伝えたのは伊豆からやってきた山下福太郎さん(1899-1963)であったことなど貴重な情報が得られている点、三、伝統漁法テンカラ釣りの名人、天野さんから自然と川と人間の営みの中に漁法や漁具など貴重な技術とともに、自然の恵みに感謝するそして川を大切にするという精神も教えてもらい、自分たち自身の学習としている点、四、フィッシングセンター水辺の館での調査でリアルな体験をしてそれを報告している点、などです。現地調査、伝承者からの直接の聞き取りやそこからの学びが大切です。これからがんばってください。

佳作

「諏訪信仰について」

東京・香蘭女学校高等科

諏訪信仰

「『古事記』を読む」という選択授業からはじまり、よくここまで調べましたね。評価できる点をあげておきます。一、教室で古事記を読むという授業で学んだところで文字からだけの受け身の知識の習得に止まるのではなく、そこから諏訪信仰について深く追跡している点、二、たいへんたくさんの参考文献を集めて、よく読んで知識を整理している点、ただし、参考文献の中には、良質の記録や文献も多く含まれていますが、なかにはパンフレット類、作家の推察、辞典の類などもあります。高校生ですからまだまだ先の事でしょうが、学術的に調査や研究を行なう場合には参考文献の吟味も必要になります。三、事前の準備をしてから、直接諏訪の現地を訪れて、主要な場所を数多く回って情報を集めている点、四、そして、机の上で文献を読んでいたときと、現場に行ってみたときのちがいに気が付いている点、それは実はひじょうに大事なことです。次のアプローチの仕方を考える必要が出てくるからです。そこからまた新たな発見へもつながるでしょう。これからがんばってください。

佳作

「人形浄瑠璃公演活動をととして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する」

徳島県立那賀高等学校

人形浄瑠璃部

かつて昭和30年(1955)当時、林業を主要産業として約15,000人の人口で活気のあった那賀町が、平成29年(2017)の現在は約9,300人となっている。しかし、

そうした中で地域の活性化をめざして活動する若い人たちの姿がある。何よりもそれが貴重である。歴史に培われてきた地域社会は、なかなかしぶとい、それが日本社会の底力である。評価できる点をあげてみる。一、いま述べた郷土の民俗芸能の伝承への参加と地域社会への貢献へという活動動機である。二、活動計画として、復活・実践・伝承へ、聞いて学ぶ・行って探究・調べて究める、そしてグローバルに発信、というしっかりとした計画性が立てられてその実践がなされている点、三、具体的な活動の様子が豊富な写真データとともに示されていてわかりやすい。四、後半部に収録されている新聞記事やパンフレット類で、貴重な情報が収録されており、自分たちの活動の位置づけを理解してもらえるように工夫している。これからがんばってください。

■個人の部

優秀賞

「ダンスで笑顔溢れる地域へ～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～」

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校

高橋 理歩

自分が幼稚園のころから通っているバトントワリングチームでの体験をもとに、ダンスとパレードの意義について追及した姿勢がたいへんよい。動機づけが明確だからである。二、用語の定義についてもしっかりと準備ができており、それにより具体的なテーマパークパレードの事例分析に論理的な解説を心がけている。三、千代田区における地域活性化運動の現状を調べ、東京ディズニーランドをはじめその他のダンスレッスンへの参加型調査をしっかりと行なっている点、四、そうした作業の上で、屋外パレード(途中停止・参加型)がよりよい地域活性化運動の形態としてもっとも適しているという結論を得ている点、などである。これからがんばってください。

優秀賞

「漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～」

愛知県立杏和高等学校

飯田 真世

自他の本棚からという「漬物」についての身近な疑問から、しっかりと関連する情報を集めてよくまとめましたね。漬物はたしかに、日本の伝統的な食文化の中でも重要なものです。日本各地の漬物文化関連資料情報の収集と比較、そこから地理的な地域差や、歴史的な漬物の変遷史が明らかになるといいですね。これ

は一地域の追跡ながら貴重な研究でした。評価できる点をあげておきましょう。一、旧甚目寺町にある萱津神社の「香の物祭り」を中心に、その祭りに参加しての調査情報をよく集めており、写真データなどで分かりやすく示している点、二、熱田神宮との関係まで聞き取りできており、印刷物ではあるがその関連資料も入手して歴史的な追跡も試みている点、三、萱津神社の宮司さんへの聞き取り調査情報も貴重である。四、また後半の部分に、関連する文献類やパンフレットなどの情報を数多く掲示して参考に供している点、などです。これからもがんばってください。

佳作

「雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ」

東京・明治学院高等学校

山本 明香里

子どものころから地域の秋の一大イベントであった鬼子母神の御会式について、アメリカ留学中に、しっかりと説明できなかったところからあらためて調べてみることにしたという。評価できる点をあげておこう。一、御会式の行列構成や10月16日、17日、18日のルートがわかりやすく示されている点、二、万灯についての情報や太鼓についての大切な情報がよく調べられていてわかりやすく示されている点、三、纏をはじめとする衣装類についても調べている点、四、参加者への聞き取り調査でリアルな現場情報が集められている点、などである。国際化の中で、これからも地元の伝統文化についてしっかりと調べて、説明し情報発信できるようにがんばってください。

佳作

「農家について本当に知ってる？～秋田県横手市の農家の生活について～」

東京・大妻多摩高等学校

川嶋 みずか

自分の身近な生活の中から、秋田県横手市の農家と自分の家の食生活が家族や親せきを通して深くつながっていることに気づき、他人の目を通した外からの調査でなく身内の目からの内からの調査を試みて、よくがんばりましたね。評価できる点をあげておきましょう。一、横手市の位置関係と曾祖父の農家経営の現状をまず説明している点。二、親族が集まり大宴会を開いて親睦を深めているむかしからの横手地方の風習がリアルに記されている点、そして、それとともに現在の曾祖父の生活リズムが示されている点、三、秋田の漬物、砂糖愛、味噌愛、こしあん作りなどの食文化の一端がよく示されている点、四、お盆や彼岸などの行事についてや、豪雪地帯の冬の食材確保のための一つの手立てとして自家用の缶詰機をもって自家製缶詰を作っていることを紹介している点、などである。東京に住んでいても農村のむかしからの生活につながっていることについて、これからも調査などががんばってください。

地域文化研究部門選評

国立歴史民俗博物館 名誉教授 常光 徹

■総評

団体の部、個人の部ともに最優秀賞は見送られたが、しかし、今回も充実した内容の作品が揃っていた。戸山高等学校地理歴史部の「明治通りの調査」は、分担をして調査をした部員七人の努力が、まさに環状線のように繋がって生まれた成果といえよう。杏和高等学校郷土研究チームは、4年間、祖父江の虫送りをテーマにして調査をつづけているが、今年もまた、新たな発見と展望が示された。高橋理歩さんの「ダンスで笑顔溢れる地域へ」は、研究の狙いに沿って計画的に調査を実施し、それが論理的にまとめられていて読み応えがあった。飯田真世さんの「漬物は語る」は、本論を構成するために実に多様な史資料に目を通してることが、分厚い資料編からうかがえて興味深かった。いずれの作品も、自身の体験や身近な生活の場から発想して取り組んだテーマだけに、着実に実感のこもった内容である。

■団体の部

優秀賞

「明治通りの調査」

東京都立戸山高等学校

地理歴史部

母校の前を通っている明治通り（33.3km）を中心に、その沿線の歴史や現在の街の状況などについて調査をした力作である。七人の部員が区間を分担し、10ヶ月をかけて調べた内容だけに充実している。毎日のように見ている環状線だが、それは部分的、断面的な光景といってよい。今回、起点から終点までをたどることで、明治通りをめぐる歴史と文化のまとまった世界が描き出されていて興味深い。身近な生活の場への関心から生まれた成果である。また、写真と地図が効果的で、位置関係が掴みやすいし、なにより、読んでいて楽しかった。

優秀賞

「今年も祖父江の虫送りを追って～杏和高校 4年目の参加～」

愛知県立杏和高等学校

郷土研究チーム

タイトルに掲げているように4年目の調査である。

今年はメンバーが19名と多いが、それぞれができる範囲で行事に参加し、体験を通して実感、そして考えるという姿勢は変わらない。松明の燃やし方一つをとっても、風向きなどによって微妙に違って来る。そこにさまざまな工夫と智慧がこめられているのに気づいたのは収穫である。今回は祖父江の虫送りだけでなく、近隣で行われている行事を調べて記録し、また、尾張地方の虫送り資料を収集して検討するなど、地域による違いから祖父江の行事を相対化する視点がうかがえる。

佳作

「ふるさとの川の恵み～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～」

岐阜県立益田清風高等学校

社会探究

地元を流れる益田川（飛騨川）を取り上げて、川をめぐる人々の暮らしの歴史についてのレポートである。なかでも、伝統漁法と釣り文化に造詣の深い長尾伴文氏と釣り師の天野勝利氏を招いての話は興味深い。大きな魚が少なくなったのは、護岸工事や流路の整備とも関係しているという長尾氏の指摘は、生活の安全と自然環境を考える上で大切な問いを投げかけている。天野氏の毛バリの制作とテンカラ釣りの話には、川や魚を深く知る人ならではの知恵と工夫が見られて示唆に富む。

佳作

「諏訪信仰について」

東京・香蘭女学校高等科

諏訪信仰

諏訪大社を中心とする信仰について調査をし、まとめたものである。事前の学習が周到で、関係する神話、伝説、祭礼などについて、文献を丁寧に読み込んでその特徴や課題が分かりやすく整理されている。それぞれが問題意識をもって参加したフィールドだけに、現地での見聞から理解が深まった場合もあれば、新しく生まれた疑問や新鮮な発想など、各自が感じた内容がよく伝わってくる。十分に準備をして現地を歩くことの大切さがわかるレポートである。

佳作

「人形浄瑠璃公演活動をとらえて地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する」

徳島県立那賀高等学校

人形浄瑠璃部

2015年に誕生した人形浄瑠璃部の活動内容と、そこから学んだ阿波の伝統文化に関する知見をまとめている。「実践から復活、伝承へ」「聴いて学ぶ」「行って探求」「調べて究める」「グローバル化に発信」と明確に目標を定めて実践している。県内を中心に活動実績を重ねるとともに、人形浄瑠璃に関する歴史や文化についても積極的に調査を進め、着実に力をつけていることがわかる。試行錯誤しながらも、前向きに挑戦していく姿勢が感じられて頼もしい。

■個人の部

優秀賞

「ダンスで笑顔溢れる地域へ～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～」

東京・東京大学教育学部附属中等教育学校

高橋 理歩

バトントワーリングチームの一員として千代田区の地域活性化運動に参加をしてきた高橋さんが、さらに効果的で魅力あふれる運動をめざして行った調査・研究の成果である。全体の構成がしっかりしており論旨が明確である。とくに、TDLをはじめ4つのテーマパークに注目し、そこから得られた知見をもとに、千代田区のパレードが抱える課題、改善策および予想されるメリット・デメリット等について論じていて興味深い。ダンサーとしての自身の体験が根底にあるが、インタビューや関係資料を駆使して、具体的かつ論理的に描いており説得力がある。

優秀賞

「漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～」

愛知県立杏和高等学校

飯田 真世

愛知県あま市の萱津神社で行われる「香の物祭り」について調査し、その歴史や祭りの現状についてまとめたものである。日本で唯一の漬物の神として信仰をあつめる祭りの報告は、本殿祭と漬込みの神事をはじめとして、今日の祭りの姿がわかる貴重な資料である。また、明治維新で熱田神宮への香の物の献納が途切れたあと、大正期に復活するまでの経緯を、聞き書き等で明らかにし、さらに、復活前と復活後の変化について比較している点も興味深い。とくに、本論を裏付ける資料編が充実しているのは評価される。

佳作

「雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ」

東京・明治学院高等学校

山本 明香里

雑司が谷鬼子母神御会式について、その由来や用いる道具、当日の行列などについてまとめたものである。山本さん自身が、子どもの頃から参加をしているだけに、御会式が近づいてきたときの、わくわくするような雰囲気が伝わってくる。記述の内容も具体的でわかりやすい。長い歴史をもつ御会式だが、道具や行列には、その時々好みや工夫があり、少しずつ変化をしている様子が描かれていて示唆に富む。また、参加者の話をもとに、最近の問題点や課題を指摘していて参考になる。

佳作

「農家について本当に知ってる？～秋田県横手市の農家の生活について～」

東京・大妻多摩高等学校

川嶋 みずか

秋田県横手市に住む曾祖父（大叔父）の暮らしぶりや、家を中心とした年中行事、さらに秋田県の食文化の特色についてまとめている。毎日のように口にしている味噌汁や漬物など家庭の味が、祖母の兄弟がいる横手から届けられていることから関心が芽生えたようだ。身近な生活から発想し、調査をした結果を軽快な文章でつづっている。お茶っこは一杯で返すな、お正月よりも大晦日を重視といった、調査で気づいた事柄をさらに発展させると、民俗的に興味深い成果が得られるだろう。

日本の心、地域の文化を伝えるために

群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校

パソコン部

（川端雄哉、千木良優斗、後藤岳、白井佑美、生方優奈）

応募の動機

私たちは、地域の民話や文化などの研究調査を行う中で、この活動をもっと多くの人に知ってもらいたいと思っていました。そうしている中で、顧問の先生からこの「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストのことを伺い、このコンテストに応募することで、多くの方に活動内容を伝えることができると思ったからです。

研究レポート内容紹介・今後の課題

現在の日本では、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けた様々な活動を行っています。そして、観光産業は地域経済の活性化につながると考えられています。そのため、多くの外国人の方にみなかみ町を知っていただき、来訪していただきたと考え、みなかみ町役場観光商工課の方にみなかみ町の特徴や観光資源について教えていただきました。その中で、観光商工課の方の話の中にあつた文化的要素から、「歴史・文化」の活用注目し、日本人に馴染みのある「民話・昔話」を利用することによって、子どもから大人まで幅広い年代に楽しんでいただけたらと考えました。

私たちは、みなかみ町に伝わる民話や昔話を調べるため、猿ヶ京ホテル大女将の持谷靖子さんにご協力いただきました。みなかみ町に伝わる民話は、昔話や神話、伝説、自然で起きた出来事や、動物に関するもの、村話や噂話など500以上あることがわかりました。これらの民話を英訳し、日本や地域を紹介することで、私たちにもインバウンド観光での地域貢献ができるだろうと考えました。

絵本の内容は、「外国人には物語の結末がはっきりしているものや伝説などが好まれる」と持谷さんからアドバイスを受け、絵本のコンセプトを「みなかみ町の不思議話」とし、各部員で選択していきました。次に、選んだ民話を外国人向けに英訳する作業に取りかかりましたが、英訳にどの部員も苦労しました。それは、方言や擬音語をどのように英訳するのか悩んだためでした。そのため、英語科の先生とALTの先生にご協力いただきながら各自完成させることができました。イラストは私たちのオリジナルで作成し、個性豊かな挿絵を作ることができました。

そして、絵本を完成させ、みなかみ町のホテルなどに置いていただきました。しかし、「絵本はすぐになくなりました」とホテルから連絡を受けたことや、直接外国人観光客に配布した際に、外国人の方はスマートフォンやタブレットを片手にお話をされていたことから、絵本がなくても見られるようにしようと考え、電子書籍を作成していきました。

今後の課題は、プロモーション活動が不足しているため、みなかみ町内の観光施設に電子書籍のQRコードやURLが掲示してもらえるように、みなかみ町観光商工課やみなかみ町観光協会と協力してPR活動に取り組んでいきたいと思っています。また、インターネットを活用した口コミ効果を利用し、多くの外国人に私たちの絵本やみなかみ町に興味を抱いていただき、広めてもらいそれをきっかけに来訪してもらえるようにしていきたいと考えています。



ALTの先生と入力した英文の確認作業



実際に存在する地蔵桜（一宮桜）

佐野の舟橋・佐野の渡しの説

群馬・高崎商科大学附属高等学校
社会部進学女子2年
(高橋紀香、三堀歩海)

応募の動機

私たちは、顧問の先生からこのコンテストがある事を知り、地元の事について調べていた所、親が「佐野の舟橋」の民話の地を通るたびにこの話をしてくれた事を思い出して、「佐野の舟橋」の民話を調べてみました。するとこの話は奈良・平安時代に有名だったという事を知り、他の人にも伝えたいと思いました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

「佐野」という地名は、天武天皇十（西暦681）年に建てられた山ノ上碑の文中に「佐野三家（さぬのみやけ）」と記されていた。佐野三家は大和朝廷の直轄地で、朝廷の官吏者が住んでいた。また、神亀三（726）年建立の金井沢碑には「下賛郷（しもさぬごう）」とある。この二つの碑文から奈良・平安時代は、烏川を挟む広域を佐野と呼んでいたといわれている。古くは「さぬ」と言われ、中世以降は「さの」と読まれている。この事から佐野は高崎市内でも最古であると同時に、群馬県内でも最古であり、全国的に見ても古い地名である。この地は、謡曲『舟橋』『鉢木』『定家』のゆかりの地であると同時に、半径200m圏内にこの3つにまつわる史跡がある。

『佐野の船橋（省略）』

遙か昔、烏川を挟んで東の佐野に朝日長者、西の片岡に、夕日長者と呼ばれる長者がいた。二人の長者は、互いに力を競い合っていて、隙があれば相手を滅ぼそうと狙っていたという。その朝日長者には那美という美しい娘が、夕日長者には小次郎という凛々しい若者がいた。

ある夏の夕暮れの事。烏川に架かる舟橋のたもとで、那美が侍女と月見草を摘んでいると、そこへ小次郎が、馬で通りかかった。那美を一目見た小次郎はその美しさに心を奪われ、那美もまた、小次郎の若衆ぶりに頬を染めた。

翌日から二人は月見草の開く夕方になると、橋のたもとでこっそりと会うようになった。しかし、その逢瀬はいつまでも隠し通せる訳もなく、暫くして長者達に知られてしまった。

「朝日長者の娘などに、会ってはならん!」「夕日長者の息子なんぞに娘はやれん!」と長者たちの怒りは凄まじく、二度と会わないようにと、那美も小次郎もそれぞれの屋敷に閉じ込められてしまった。しかし二人の思いは募るばかりだった。

ある夜、必死の思いで屋敷をぬけだした那美は、烏川の舟橋を、小次郎のいる館を目指して走った。ちょうど懐かしい舟橋の中程まで来た時、突然那美の姿が「あーっ!」と闇を切り裂く悲鳴と共に、烏川の流れの中に消えた。二人が会えないようにと長者達が使用人に言いつけて、橋板を何枚か外させておいたのだ。

そこへ、那美に会いたくて、密かに屋敷をぬけ出した小次郎がやってきた。橋のたもとで、那美の悲鳴を聞いた小次郎は、声のした方へ夢中で駆けた。そして、外されている橋板に気がついた。「那美っ、那美っ!」足元の闇に向かって、小次郎は声のかぎりに叫んだ。しかし、帰ってくるのはどうどうと流れる水の音だけだった。そして、那美の死を悟った小次郎は、那美の後を追って、激しい流れの中に身を沈めたという。

その後、烏川の急流に那美の後を追いかけて心を遂げた小次郎と那美の物語は、「恋の舟橋」として世間に広がった。その世代の若い男女ばかりでなく、歌詠みたちの悲しいモチーフともなり、烏川に掛けられた舟橋を訪れるものが多くなった。

しかし、舟橋に夜な夜な怪異が現れた。舟橋を渡る若者や娘達は、幽霊に出逢って腰を抜かして、言うようにして逃げ帰ったのだ。「あれは心中した若者たちの怨恨だろう」と童の口の端にまでのぼり、遠近の人々も恐れて舟橋はいつの間にか往來が途絶えてしまった。

これを知ったある旅の高僧が、「それは村でもお困りでしょう」と経を誦じねんごろに供養を行い、舟橋のエノキの根本に石の観音像を建てた。このエノキは舟橋の舟を繋ぐ大木であったが、それから不思議に怪異は起こらなくなり、水も干しあがり、一条の川原となって、舟橋は元のように人通りも増して来た。それからずっと後の文政10年（1827年）、高崎宿あら町延養寺の住職、良翁（りょうおう）が、『かみつけの佐野の舟橋とりはなし 親はさくれど吾（わ）はさかるがへ』という万葉集の古歌を板碑に刻んで、高崎、藤岡間の街道の傍に建立したものが、今に残されている。

私たちは、群馬県内および他県（全国）にこれと似たような民話があるかどうか調べてみたが、残念がらなかった。しかし、この話の結末は、「長雨で水かさが増した川の流れが二人を呑んだ。」「長者たちが板を何枚かはずし、それを知らない那美が川に落ちて、後から来た小次郎が那美の悲鳴を聞いて川に身を投げた。」「朝日の長者が家の者に命じ、小次郎の通ってくる舟橋の板を取りはずしたため小次郎が川に落ち、那美は何日待っても小次郎が姿を現さない悲しみから、川に身を投じた。」など、資料によって異なっている。このように、佐野の舟橋の民話は時代の流れと共に、話の内容が変化していったのだと私たちは考える。

また、万葉集や和歌の数を見れば分かるように奈良・平安時代に「佐野」の地域は関心の深い地域であったということがわかった。

以上の事から「佐野の舟橋」の民話は昔の文化人の間では有名だったこともわかる。

今回は現地でのインタビューをしていなかったため、今後は、インタビューをふまえて詳しくまとめられるようにしたい。



佐野の舟橋歌碑



かつてここに舟橋があったとされる現在の佐野橋



佐野橋周辺図

下小鳥町の首塚伝承

群馬・高崎商科大学附属高等学校
文芸部

（吉野初夏、高木里緒、田作聖羅、堀田悠季乃、石井綺穂、長谷川由菜）

応募の動機

学校の近くにある首塚について、小さい頃から興味があり、それを部活動内で調査してみようと思ったのがコンテストに応募したきっかけです。フィールドワークを通じ、文献からでは読むことができなかった事実をまとめ上げることができました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

群馬県高崎市下小鳥町には「首塚」と呼ばれる石碑があります。

元和二年（1616）秋、高崎藩士検見役謀二人、下小鳥に来て検見をしたが、度を越した厳しさにたえかねて、村民は大いにこれを恨んだ。なかでも血気さかなる若者数十人は、役人の帰途を擁してこれを殺してしまった。藩主松平丹波守はこれを聞いて激怒し、翌年正月四日、この部落に出兵し老若男女のことごとくをみなごろしにしたという。（引用）

下小鳥村民が大量虐殺された慰霊碑とされています。しかしこの碑の通りの歴史的事件は明確には記載されておらず、実際起こった事件であるかが疑われています。伝承として残ってはいるが確かな記録として残ってはいないというのが、この碑の特徴です。そこで近隣住民に聞き込みを行いこの事件を調べてみました。

一つは「生き残りがいた」説についてです。文献ではなぜこの事件が伝わっているのかははっきりしない部分がありました。しかし聞き込みをすると、どの方の話でも生き残った人物が紹介されました。そしてなぜこの事件が伝承としてしか伝わっていないかとして、書物に記録を残し町民の生き残りを世に知らしめてしまうことの危険性を考えていました。だから口伝えで言い伝えられたのだろうという結論でした。

もう一つが「安中藩」についてです。聞き込みでは安中藩は村民を助ける側の藩であるのに対して、文献では高崎藩に加勢するという真逆の立場でした。村民を助ける白装束の馬が登場しますが、それが安中藩なのかは当時の情勢から考えると否定的な方も多くいました。けれど、聞き込みから「小天狗」という謎の存在（正体不明の忍者）が語られました。噂の域を出ない存在だから記録として残っていないのか、はたまた正体を知られないほど上手く存在が隠されていたのかわかりません。「小天狗」という存在が藩同士を繋ぐ役割、もしくは藩同士を仲違いさせる役割を果たすのでないかと考えました。もしかすると安中藩の使者が小天狗であり、高崎藩と繋がりを持っていたのではないかと考える方もいました。

今回は下小鳥町の話を中心として考えましたが、他の村や町にもどのような首塚伝承があります。他の地域と比較することでよりこの事件をまとめ上げるのが今後の課題と考えます。



首塚の慰霊碑



首塚について話をさせていただきました

民話「川上へ流れた仁王さま」の世界

岐阜県立益田清風高等学校
地域研究

（奥田俊輝、河合聖哉、熊澤歩倫、佐藤翔、杉山慎悟、信田結伍、松井悠祐、
山下樹林、石丸譲一、伊藤海斗、神田わこ、熊崎真次、西村未羽、
野中千乃、日置大勢、二村優衣、船坂映未、松下莉子、蓑島宏奈）

応募の動機

私たち益田清風高校総合学科では、「地域研究」という授業で、地元である下呂市の伝統や特徴について学んでいます。その授業で、下呂市の民話について調べる機会があり、興味を持って調査をしました。調査を進める中で、下呂市には各地域にその地域の伝統を表す民話があることが分かりました。そして、その民話の面白さや下呂市の魅力を県外の人にも知ってもらいたいと思い、応募しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たちは、下呂市の民話について調べるなかで「川上へ流れた仁王さま」という話に興味を持ちました。そこで、民話に出てくる地域や出来事、自然について調査を行うことにしました。そして、授業時間や夏休みを利用して、実際に現地に足を運び、自分たちの目で確認をして分かったことや感じたことをまとめました。

A：民話の舞台

- ・民話の舞台である萩原町や宮田、小坂といった地域で民話に登場する場所を分かりやすく地図にまとめました。
- ・自分たちで地図を作成することで、民話に登場する場所の位置関係がよく分かりました。

B：民話の分析

① 藤ヶ森観音

- ・民話に登場する玉龍寺があったとされる藤ヶ森観音の現地調査を行い、昔そこが玉龍寺であったことが分かりました。
- ・藤ヶ森には「大藤」という大きな杉の木があり、その木が藤ヶ森の由来となったことも分かりました。

② 三木氏の桜洞城

- ・民話の中にある飛騨の国であった戦いを調べると、三木自綱という武将が萩原町内にある桜洞に城を構えていたことが分かりました。
- ・戦国時代の萩原町でも多くの戦いがあったことが分かりました。

③ 藤ヶ森観音近くの益田川

- ・仁王さまが投げ込まれたとされる益田川の様子を見てみると、流れが激しくて、とても川上の方へさかのぼっていきけるとは思いませんでした。仁王さまが流れに逆らって、川上へ行ったとき、村の人たちはとても驚いただろうと思いました。

④ 小坂町周辺

- ・現地調査の結果、小坂町周辺には仁王さまの絵が描かれた看板があったり、小太郎という名前の使われたお店があったり、民話と町が深く関わっていることが分かりました。

⑤ 長谷寺

- ・長谷寺には、今もなお、流れてきた仁王さまがまつられていることが分かり、驚きました。
- ・怪力を手に入れようと大相撲の「横綱千代の山」などの力士たちが参拝に訪れたことも分かりました。

C：力持ち小太郎火まつり

- ・小坂町で毎年行われる力持ち小太郎火まつりに参加し、まつりがどのようなものか調べました。
- ・力持ち小太郎の「力布」も登場し、小坂の人たちの祭りに対する熱い思いが伝わってきて、とても感動しました。

調査を通じて、下呂市には地域と関係の深い民話がたくさんあることが分かりました。しかし、下呂市民でも民話のことを知らない人は多いと思います。昔から大切に受け継がれてきた民話が途絶えることが無いよう次の世代にどう伝えていくかが今後の課題だと思います。私たちにできることはないか、しっかりと考えていきたいです。



長谷寺の小太郎ゆかりの「伝説の石」



力持ち小太郎火まつりの広告



民話に登場した「仁王さま」

川との死闘～与三と人柱観音像にこめられた思い～

愛知県立杏和高等学校 2年
坂 東 壮一郎

応募の動機

学校の先生の勧めもあり夏休みに身近にある民話について研究してみようと思いました。調べていくと地元の近くに流れている大きな川（木曽川）に人柱伝説「与三」があることがわかりました。自分の地元になんな話があったということを全く知らなかったのので、「これを調べてみたい！」という衝動にかられて研究を始めました。

研究レポート内容紹介

まずは川にある人柱伝説「与三」の民話の話の内容について調べました。そこで民話「与三」が一つの内容ではなく少しずつ内容が異なったものがいくつもあることがわかりました。そこからすべての話の共通点や異なっている点などをまとめてすべてを比較していきました。そうすると大まかに2つの結末があることに気が付きました。

その結果からなぜ一つの話の結末が大きく分かれてしまったのかを自分なりに考察していきました。様々な考察をしてみました。僕一人で考えていくと偏ってしまうのでこの人柱伝説に詳しい人達にも話を聞きに行きました。そこで話を聞いていく中で貴重な話や体験もさせて頂きました。

当初、与三は村人に落とされてしまったのではないのかと思っていましたが、「昔の人は自己犠牲の精神が強かった」と聞いて自ら進んで人柱になったという話もあり得ないことではないと思う自分も出てきました。

与三についてもっと知るために民話の舞台となっている人柱観音像を訪ねるとともに供養祭などについても調べました。与三の菩提寺の住職さんの話を聞き、現地に足を踏み入れることで、与三が地域の人々からどれほど大切にされていたのかを知ることができました。またかつての川底や川沿いを歩くことでこの地が洪水との戦いの場所であったことも実感することができました。

今回の論文を通して、自分の人生の中で忘れることのない体験を沢山することができ、精神面でも人見知りを克服することができ、周りの人に助けられて生きていることにも気づかされ、多くものを得ることができました。そして民話はただの昔話ではなく大切な歴史で現代でも生きていることを知る事ができました。



人柱観音像



—宮市尾西歴史民俗資料館の学芸員さんに話を聞く

今後の課題

今回調べて行く中で人柱の与三を供養するために年に3つの行事があることを知ることができましたが、今回の調査期間内では参加することができなかったのので、来年はできるだけ参加し研究を深めていきたいと思いました。今回の論文で民俗学やフィールドワークをすることの楽しさを知る事ができたので、今後も取り組んでいきたいと強く感じました。

東京・町田市における妖怪伝説

東京・和光高等学校 3年
木原愛理

応募の動機

私は、家族旅行で岩手県遠野市の「とおの物語の館」へ行き、遠野の昔話を語り部から聞きました。遠野の昔話には、私の全く知らない話もありましたが、知っているものと同じ話もありました。そこで昔話はその土地独自に語り継がれているものと、日本国内どこでも共通に語り継がれているものがあるのではないかと思います。もし、そうであるなら、私が住んでいる町田市にはどんな昔話が残っているのだろうと興味がわき、最も関心のある妖怪を題材としたお話に絞って調べることにしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私は家族旅行をきっかけに、自分が住んでいる町田市にも妖怪の話が残されているのか知りたくなりました。また、妖怪の話が残っているとすれば、私が初めて耳にするような町田市で独自に語り継がれている特有の話と、よく知られた全国規模で語り継がれている話に分類できるだろうと考えました。そして分類していく過程で、同じ土地に特有の話と全国的な話の2種類が存在する理由がつかめるのではないかと期待し、研究テーマとすることにしました。

研究は、まず町田市の民話が収録されている本から妖怪に関するものを抜き出すことから始めました。そしてその中から、町田市に多く伝わっているキツネの話と、共通のキーワードをもつ二つの池の大蛇伝説について調べることに決めました。調査の際には、寺の住職など古くからその土地に住んでいる方や、本の編集者や池の管理事務所、市立博物館の学芸員さんなどに聞いて回りました。聞き取りで採集できた話をまとめ、その裏付けを古い地図や資料、史実から調べ、自分が考察した結論につなげていきました。

この研究を通して、たくさんの方が自分の住む地域に伝わる話を大事にしていることを知りました。そしてこれまで存在すら知らなかった町田市の民話は、私達が後世に語り継ぐべきものであると思いました。

今後の課題は三つあります。一つ目は、昔話の分類方法として『知っているか、知らないか』といった個人の主観的なカテゴリズ以外の分類方法を見つけることです。二つ目は、町田の妖怪についての考察が、他の地域でも同様に言うことができるのかということを研究することです。三つ目は、自分達の地域の昔話を残していくために活動していくことです。

私はこれからも研究を深め、この地域に生まれ、育った者として、郷土の民話を残していくことに微力ながら尽力していきたいです。



築田寺の池。大蛇が池を通して八王子の柚木の長池と行き来していたと言われている。



狐火が数十年前にも見られたという並木周辺。今は住宅地が山を切り拓いている。



薬師池公園内の桜の木。昭和初期にも木の上で日光浴をしている蛇の姿が見られている。今は木になって人々を見守っているという。

チンチン山考

愛知県立時習館高等学校 2年
仲 川 晴 斐

応募の動機

当時の事情から口に出すのも憚られ、わずかな関係者にのみ伝承されたが、その伝承さえも時の流れにより忘れ去られてしまった史跡に偶々巡り合い、新たに加わった歴史部で何か功績を残したいと思いました。そんな時学校掲示板にて見つけたコンテストの応募要項。偶然が重なり必然となりました。

研究レポート内容紹介

愛知県豊橋市杉山地区にあるチンチン山（山ではなく塚）と呼ばれる史跡は、戦国時代長篠の戦いで織田・徳川連合軍に敗れた武田氏の残党（武田氏、山本氏）が逃れて来てそこに住み着き、戦いで死んでいった一族を弔うために建立した塚であると伝わっています。

長篠の戦い後、織田・徳川の武田氏残党狩りは熾烈を極め、僧籍に在るものまでことごとく誅殺しました。しかし杉山地区に逃れた武田氏残党はその熾烈な試練に耐え忍び、今日現在まで脈々と子々孫々にその血を繋ぎ永らえてきました。

そこで、チンチン山近辺に在住する子孫でさえ誰の系譜に繋がる者であったのかがわからなくなった現在、長篠の戦い以後武田一族に名を連ねる者を一人一人しらみつぶしに捜してチンチン山を築いた武田氏の残党とは誰であったのかを明らかにしていこうと考えました。

私がまず考えたのが、チンチン山に逃れてきた武田氏、山本氏は熾烈な残党狩りからは見向きもされない程家中での身分が低い者ではなかったのか？または血の繋がり薄い者達ではなかったかということです。そして彼らが杉山地区（敵の支配地）で有利に生きてゆくために地元民に自分たちの本当の身分を偽り、尊い血の流れる者であるとだまして武田、山本姓を名乗ったのではないかと考えました。

次に長篠の戦い及び残党狩りにおいて、首実検され確実に死が証明された者以外に長篠の戦い以後詳細不明の者、他の武将の家臣となった者がいないかどうかを調べ上げ、可能性のある者をすべて洗い出してみました。武田姓は甲斐源氏の血を引く尊き血筋ゆえ、武田を名乗ることのできる人物を考えて行けば自ずとその人物は判明します。その結果として一番可能性のある者は信玄の同腹弟であり、信玄に容姿がそっくりなため信玄亡き後その影武者として北条氏等を欺き続けた信廉の嫡男信澄ではないかという結論に達しました。長篠の戦いが起こった1575年に信澄は16歳。元服し初陣してもおかしくない年齢です。多分初陣し、一族の勇猛な部下（この御付の者が山本姓か？）が逐一付き添い、父親のそば近くに控えていたと思われます。しかし戦いが不利になり、負け戦となって退却する時、本軍と離れ離れとなり南に逃れ、杉山地区に隠遁したのではないのでしょうか？結果として信澄が確定ではなくそうではあるまいか？程度の結果になってしまい残念で仕方ありません。



チンチン山五輪塔



鎮沈山三界萬霊供養塔

今後の課題

今回個人でコンテストに応募し、栄誉ある賞をいただきました。しかし調査にかける時間、私自身の知識・考察不足であることは否めないものがあり、今後歴史部の全部員の力を借りて来年はもっと事実と切り込んだ内容に仕上げて行きたいと思っています。

豊川市の昔話

愛知県立豊丘高等学校 2年
鈴木 彩 水

応募の動機

私の地元である愛知県豊川市には、日本三大稲荷の一つとされる豊川稲荷があり、狐に関連した昔話がたくさんあります。

学校の夏休み課題として取り組むことになったこのコンテストをきっかけに改めて調べてみました。その中で、題材となった昔話に出会い、内容の面白さに魅せられたことから、地元の昔話を後生に伝承していくためにも、研究への意欲がわき、応募しました。

研究レポート内容紹介

「女ぎつねのしかえし」という昔話は、現在の豊川市大崎町にある快泉院というお寺が舞台です。快泉院の和尚様は、「綿ぼうが」（毎年秋の取り入れ時に家を回り、少しずつ綿や米などを寄付してもらうこと）の途中で昼寝をしている女狐を見つけ、首にかけていたほら貝を女狐の耳で力いっぱい吹き鳴らすといういたずらをします。そのいたずらで女狐は和尚様に仕返しをしようとするくらみします。日が暮れて和尚様が帰る途中、女狐は恐ろしい顔を持つ巨大な化け物に化けて、和尚様を追いかけまわすという仕返しをするというストーリーです。この昔話の面白さは、登場人物の意外な行動と狐のイメージの多様性にあります。和尚様というと堅実で真面目なイメージがありますが、軽はずみにいたずらをするという思わぬ一面を見せたということに対して、私たち高校生がそのときの気分でよくしてしまう「ノリ」という部分に重なるところがあり、面白いなと思いました。

女狐には、メスの狐という意味以外に、化けて人を騙すというイメージがあります。人を騙す悪賢い女性を罵った言い方をするとときに江戸時代から使われるようになったそうです。この昔話に登場する女狐の行いにも重なります。その一方で、狐は大切なことを教えてくれる崇拝すべき対象としても知られています。昔話の女狐も仕返しをすることで、「和尚様がそんな行いをする、人は和尚様を尊敬しなくなりますよ」という教えを示したとも考えられます。

現在も豊川稲荷の一番奥には、1000体以上の狐像がずらりとならんだ霊狐塚があります。よく見ると狐像は、一体一表情が違います。そんな霊狐塚では、狐たちのまなざしが独特な雰囲気を生み、不思議な力を感じさせてくれます。狐は商売繁盛の神であり、さらに霊狐塚にある岩が金運のパワースポットとして有名であることから、私たちに富をもたらすありがたい存在となっています。地元では、狐は良いイメージとして根付いていると私は感じます。



霊狐塚



快泉院

今後の課題

豊川市には、「女ぎつねのしかえし」以外にも狐に関する昔話があります。今後は、他の狐に関する昔話や、豊川稲荷に関する昔話の研究をし、地元に残る昔話をより深く知ってもらうために多くの人に語り継いでいきたいと思います。

愛知県弥富市「おみよしの松」

愛知県立杏和高等学校 2年
袁 島 千 東

応募の動機

「大学で歴史をやりたいなら、この夏休みに地元のことを調べてみたら」と担任の先生に声をかけられた。休みを利用して挑戦してみようと思い、自分の住んでいる弥富にある「おみよしの松」について調べてみた。

研究レポート内容紹介

研究は以下の手順で行った。

- 1 おみよしの松の昔話を調べる。
- 2 おみよしの松について調べる。
- 3 およしの松の昔話の由来を調べる。
- 4 繋がり深い天王祭を見に行くと共にそれとの関係を考えて。

研究を通し感じたことは以下の通りだ。弥富の土地は常に洪水の戦いの土地である。常に自然の力にさらされるこの土地で新田の完成や堤防の完成は念願のことであった。それを記念して植えられた松。その時、偶然、神として津島神社からお神葎船が漂着したのは何よりも喜びだったんだろう。その松は、そこにいる人をいつまでもいつまでも見守るシンボルとして存在することになる。だからこそ「おみよしの松」という名がついた。だからこそ、昔話の中でも、津島神社の神の化身である切られた木の子孫が、生え替わりいつまでもいつまでも見守ることになっているという話になっているのではないかと感じた。

おみよしの松は、以前弥富中学校内にあったが、移転後は、スポーツ公園にそびえ立ち誰も見ることができる。一方移転した新しい弥富中学校の土地にもみよしの松の子孫が植えられている。先輩方が数十年にわたって「おみよしの松」に見守られたように、私もこの子孫の松に見守られて3年間を過ごした。今後も後輩たちを見守ることになる。その歴史の繋がりや素晴らしさを今回の研究で認識することができた。

今後の課題

このおみよしの松について調べる作業に入ったが、夏休みに学校祭の実行委員の仕事やクラス企画の作成に追われてあまり多くの時間を使うことができなかった。次はおみよしの松と天王祭との関係と詳しく調べると共にみよし船がついたほかの地域も調べたいと思った。さらには弥富といえば伊勢湾台風がある。私達が住んでいる地域は時代を経ても洪水と戦う地域である。私の祖母が具体的に体験しているので聞いてみたい話だと強く感じた。



おみよしの松



おみよしの松の子孫



地域民話研究部門選評

國學院大學教授 花部 英雄

■総評

「地域民話研究部門」に応募されたすべての作品に目を通し、審査を終えたところで、今年度の応募者および次年度の応募者のために、改めてこの部門を審査する側の、意図とねらいについて明らかにしておきたい。最初に、「民話研究」では何をやればいいのか。次に、どのようにやればいいのかということについて述べる。

まず何を研究すればいいのかということであるが、今回の団体と個人の部における最優秀賞の、それぞれの講評を併せて参考にしてもらいたい。まず「団体の部」の最優秀賞は、群馬県の民話を英訳した「ミニ絵本」を作り、外国人の観光客に提供し楽しんでもらうという活動である。これは民話を創造的に生かし活用していくものである。一方「個人の部」の最優秀賞は、地域に伝わる「人柱伝説」を取り上げ、伝説がどのようにして形成されてきたかを、資料の収集や聞き書きをもとに、地域の歴史や自然環境を含めて究明しようとしたものである。いわば一つの民話を選び、多く材料を集め、問題点を追究したものである。「民話研究」には以上のように、既にある民話の活用を考える立場と、民話の発生や意義を追究する立場との両極において、それぞれ自分のテーマを見つけることである。

次に、「民話研究」をどのように行えばいいのかについて述べる。まず特定の民話を選び、その類似の資料を集める。すなわち書物や記録、現地調査や関係者・関係施設等への取材を通して集める。そうして集めた材料から問題点や課題を見つけるために、よく吟味する。材料集めも材料さばきも短時間で処理しない。あれこれ模索し試行錯誤を繰り返すことによって、研究の方向性がおのずと定まってくる。

ここでぜひとも注意しておきたいことがある。それは、インターネットを用いた安易な方法による作品作りである。ネットをきっかけとして利用するのはいいが、それに頼り切らずに、あらゆる手段や方法を用いて資料の収集および分析を行う。ネットで民話や写真を選び、それに近い解説を探して、コピーペーストして完了といった安易な方法はやめた方がいい。それが、授業の課題作成であっても、短時間の切り貼りによる作成は無意味である。なぜなら、「無」から「有」を生み出す創造的営みは、最終的には自分の能力を磨く

ことにつながるのである。それがその後の自分の人生で大事なことからである。

今回の応募作品の中にも、自分でかけがえのない作品を作ろうという意欲の低い作品が多い。作品の優劣は、ひとえにモチベーションの如何にかかっている。「労を惜しんで安きに流れてはいけない」ということを、ぜひとも肝に銘じておきたい。

審査は次のような基準で行なっている。第一に、民話の地域に赴きフィールドワークを行なっているか、第二に、そのために必要な文献や資料などを精査しているのか、第三に、そのようにして得た材料を十分に分析・考察した結果を、自分の言葉でまとめているのかどうかということである。

■団体の部

最優秀賞・折口信夫賞

「日本の心、地域の文化を伝えるために」

群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校
パソコン部

この作品は民話の研究ではなく、民話を外国人にいか楽しんでもらうかという動機から発想している。日本を訪れる外国人観光客に、日本の地域文化をよく知ってもらうために、群馬県のみななみ町の民話を英語訳したものを小冊子、および電子ブックにして提供することを計画したものである。そのために、みななみ町の観光商工課や民話研究家、英語の指導者などの指導を受けながら九編のミニ絵本を作成し、観光客に提供し、その評価を受けるまでの活動をまとめたものである。

現代の社会に積極的にコミットしつつ作品化しようとする、その高い志を大いに評価したい。初めての試みでさまざまな人に会い、意見を聞き模索、体験しながら多くのことを学んだと思う。また、完成した作品を実際に観光客に提供し、反応を確かめ、自身も確かな手ごたえを感じ取ったであろう。ただ、報告書にはミニ絵本の一部しか紹介されていなかったのが、残念であった。

優秀賞

「佐野の舟橋・佐野の渡しの伝説」

群馬・高崎商科大学附属高等学校
社会部進学女子2年

本作品は、万葉集で有名な「佐野の舟橋」の歌をめぐる伝承研究である。その橋が架かっていたとされる場所を訪ね、歌の背景となる地名や事蹟などのフィールドワークを行う。続いて、その伝説を記した歴史的

文献や、伝説が記された書物を集めて、その全体像をとらえる。そして伝説がどのようにして形成されたのかについて分析と考察を加えるといった、オーソドックスな伝承研究の方法である。

しかし、今から千年以上前の歌にまつわる伝説を載せる書物が、すべて近代に書かれたもので、この間の資料に乏しいのは、この研究の難しさを暗示しているようだ。簡単にあきらめずに、これをスタートに、地道に研究を進めていくべきであろう。

優秀賞

「下小鳥町の首塚伝承」

群馬・高崎商科大学附属高等学校

文芸部

年貢の作柄を検査する検見役^{けみやく}を殺したとして、村中が殺害されたとする、痛ましい事件の実否を探る研究である。現代の「冤罪」^{えんざい}に関わるような問題でもある。死体を埋めたとされる首塚を訪ねて、それを伝える方に逢って話を聞く。それによると、偶然に生き延びた人がいて、その人により後世に伝えられたとする構図は、信じがたい事実を伝えるテクニックとして広く用いられる。だからといって、この話の事実性について簡単に結論づけることは避けるべきである。

地域の人々にとって深刻で重い歴史の問題であることを、研究に取り上げたのは真実を追究したいという熱意からであろう。伝承研究の立場としては、事実の追究はもちろんながら、伝承を伝える立場の人々の思いや、そうした思いを抱かせる歴史的環境にも注意を向けていきたい。

佳作

「民話「川上へ流れた仁王さま」の世界」

岐阜県立益田清風高等学校

地域研究

戦乱に焼け焦がれた仁王が、上流へと流れるといった奇跡の伝承である。この伝承を追って、関係する要所を訪れ、事蹟の確認と聞き書きを実施する。そこで得た資料や実体験をもとにレポートはまとめられている。その方法はゆるぎないし、伴う成果も見られる。第四章の「力持ち子太郎まつりの調査」について、祭りの概況の記事はそれとしても、祭りを見た調査者の感想だけで終わったのは少々物足りない。祭りを行う人々の、この祭りや、力持ち小太郎に寄せる心意などにも言及すべきであった。十九名の共同研究であるので、全員の活発な議論にもとづく研究の成果が十分に反映されているのかが、作品の評価にも関係し

た。

■個人の部

最優秀賞

「川との死闘～与三と人柱観音像にこめられた思い～」

愛知県立杏和高等学校

坂東 壮一郎

「起^{おこし} 東の中島 西に人のとほさぬ 火が見える」と唄われる人柱になった、与三（与三兵衛とも）の鎮魂にまつわる伝説である。何度も決壊する堤の難工事を完成させるために一命を賭したという「人柱伝説」である。歌や演劇の脚本にもなるこの伝説を追いかけて、関係するさまざまな書物や記録、散らしに至る類まで丹念に収集し、また、多くの関係者に取材し、新たな資料の発掘や意見を求めるなど、精力的で意欲的な研究である。

かつて流れていた小信川の、川筋を丹念に探しながら歩いて作った地図や写真はもちろんであるが、巻末に載せた多くの資料も貴重な成果である。研究者の地域に対する深い愛着と 생각이、使命感にまで高まってまとめさせた労作である。

優秀賞

「東京・町田市における妖怪伝説」

東京・和光高等学校

木原 愛理

町田市の妖怪伝承を複眼的な方法からとらえようとした意欲的な研究である。基本資料として取り上げた（資料①）の「妖怪伝説」を、全国的なもの、一部共通するもの、町田市特有なものに分類し、その要点をおさえたコメントは、深い学識に伴うもので、研究が高い水準であることを示しているといえよう。この成果を、町田市の独自性を明らかにするためだけではなく、日本の妖怪伝承の研究へと発展させるように進めて欲しい。

キツネとタヌキの生息地の違いを自然環境の差や、あるいは大蛇伝説を水脈の問題としてとらえるなど、優れた分析、考察といえる。研究のために多くの方に取材し、またその意見に謙虚に耳を傾けた成果である。こうした研究の基盤ともいえる町田市の豊かな自然環境が背景にあるのであろう。今後、この自然をどのように保存していくのか、将来へも目を向けていきたい。

優秀賞

「チンチン山考」

愛知県立時習館高等学校

仲川 晴斐

この作品は戦国武将マニアの労作である。偶然出会った「チンチン山」と呼称される供養碑の正体を検証するために、資料や系図、聞き取りを行いながら究明しようとした成果である。戦国時代という特殊な時代の出来事を、平易に一般化して説明しようとするところに、執筆の苦勞と妙味がある。結果よりも途中経過の考察に読みがいがあり、その豊富な歴史知識がおもしろい。

佳作

「豊川市の昔話」

愛知県立豊丘高等学校

鈴木 彩水

居住地の昔話を丁寧に取り上げ、話の背景にある稲荷信仰や豊川稲荷、そして祭神である荼枳尼天だきにてんのルーツをたどりながら紹介する。続いて、全国の狐の呼称および特質を上げ、人々の暮らしと狐が深く結びつい

ていることを示す。昔話を通して地域を新たに発見するという趣旨は、このコンクールに叶うものである。ただ、この昔話の分析すなわち和尚と狐との関係など、他の類話との比較へと、さらに関心を広げていきたい。

佳作

「愛知県弥富市「おみよしの松」」

愛知県立杏和高等学校

蓑島 千東

松が伐られる前に願いに来るという「木霊こだま舞まひ入り」の伝説が、ここでは「おみよしの松」の話として、神の化身ともされる津島神社と関わりを持って伝承されている。伝説の由来には複数あり、津島神社以外にも、地域の開発の歴史と結びつくものもある。また、地域の中学校の松と縁ゆかりを持ちながら、現在にまで伝承の根を張っていることを明らかにしてくれた。フィールドワークの成果が十分に示されている。地域を自分の足で歩きながら伝説を確認することは、見えない歴史の発見でもある。伝説の現場に出かけて撮った写真も効果的で、津島神社の華やかな祭礼の写真に勝るとも劣らない価値がある。

為朝外伝～東峰村で発見した母の墓～

福岡県立朝倉高等学校

史学部

(日野礼也、深町健人、北嶋阿弥、本田詠咲)

応募の動機

源為朝に関する遺跡や伝説は全国にいくつも存在します。しかし、為朝の母に関する遺跡と言うのは全国を調べてもまず見当たりません。その母親の墓だと伝承されている遺跡が東峰村に伝わっていることを知り、場所を特定した上で調査することは非常に興味深く、また学問的にも、伝承文化の面から見ても十分に価値があると考え、調査を進めながら映像作品として制作・応募することを目指しました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

今回の調査の骨子は、源為朝の母の墓が東峰村に存在するという伝承を自分たちで調査してその実在を確認するということでした。

源為朝は平安時代末期の武将で、弓の名手として知られ、気性が荒く、手が付けられない武将だったという逸話がある一方、庶民から慕われ続ける部分があり、「椿説弓張月」などに代表されるような為朝に関する読物をはじめ、戦前頃までは為朝に関する書籍等が数多く出版されていました。現在でも青森のねぶた祭りをはじめ、各地に為朝が登場する祭りが多く存在し、私たちが調べたところでは特に九州地方には為朝本人にまつわる遺跡や伝説などが数多く残っています。このように源為朝は今でも、そして恐らくこれからも多くの人々の心の中で存在し続けていく武将だと思われます。

その為朝の母の墓と伝承される遺跡が東峰村に存在するらしいと、ネット上のある記事から知りました。しかしその記事だけでは真偽が定かではなく、しかももともと為朝の母に関する資料や情報は全くと言ってよいほど残っておらず、墓の場所を特定することも難しく、当初から困難続きだったのですが、「でももしこれが本当だったら地元で為朝の、しかも母に関する遺跡があることって凄いことだよな」という思いから今は引退されている三年生の先輩方が調査をはじめ、それを私たち一年生が引き継いだのです。当初は調査が進まず、地元の役場に電話しても「墓なんて聞いたことがないですね」と言われ、途方に暮れたこともあったそうです。その後は文献調査をしていくなかで「東峰村に為朝の母の墓と伝えられる遺跡がある」という記述を見つけ、疑問が確信へと変わっていきました。以降、東峰村を何回も訪れ、偶然、為朝の母の墓に関する伝承を知る古老と出会うことができ、そこではじめて墓と伝わる場所の正確な位置を特定し、遺跡の実在を確認することができたのでした。さらなる調査を計画していた矢先に七月の九州北部豪雨を受け、東峰村への道路が寸断され、調査自体がストップしました。現在は開通し、現地まで再び行けるようになり、遺跡の無事は確認できたものの、地域全体の被害は大きく、以前の状況にはまだ程遠いのが実情です。私たちの調査はまだ完結していませんが、ここまでの調査内容をぜひ皆さんに知ってもらいたいと思い、今回の作品制作へとつながりました。

今後の課題としては、まずはこの遺跡の存在をもっと広く知ってもらうこと、そしてそのために私たち史学部がどのような活動ができるかを検討していくことだと考えています。調査は今後も継続しますが、これからも「歩く」、「聞く」、「調べる」のサイクルを大事にしながら、地域に息づく伝承文化の調査研究に携わっていきたいと考えています。



史学部での調査の様子



伝・源為朝 母の墓

堺大空襲とは

大阪府立三国丘高等学校

放送研究会

(長谷樹亨、竹川創、富川祐輔、森本恵梨奈)

応募の動機

三国丘高校放送研究会では、地元堺の歴史や魅力を取材して映像作品を制作する活動を行い、その情報は広く世の中へ発信しています。学校の掲示板に、このコンテストのチラシが貼ってあってコンテストを知りました。このコンテストの趣旨は私たちの活動にぴったりで、今回初参加での受賞には驚きました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

三国丘高校がある大阪府堺市には72年前、戦争末期の大空襲がありました。特に昭和20年7月10日未明（午前1時33分）の大空襲では、堺市街地を焼き尽くす凄惨なものでした。空襲では、焼夷弾が大きな被害をもたらしました。これは内部にゼリー状のナパーム油を充填して1つの焼夷弾が36発にも分かれ、雨のような音で降りそそいできました。ピースおおさか国際平和センター（ミュージアム）では焼夷弾の模型を見て学習しました。まず私たちは毎年7月9日に行われる大空襲慰霊祭に列席させてもらいました。そこで高齢の女性から、堺駅前の土居川は、落ちた焼夷弾により燃え盛る火の河となり、翌朝には累々とした死体があったお話をお聞きし、衝撃を受けました。

取材を進める中で、堺市内に残る防空壕を訪問。空襲の焼け跡を残すお寺で空襲体験をもつ住職さんにうかがった話によると、堺から和歌山の空襲が見られたという。また、95歳の女性の方からうかがった女子挺身隊の話では、竹やり訓練の話や、大空襲の翌朝、市街地で見たホースを持った状態のままの若い男性の焼死体が今も忘れられないと言います。

先の大戦では元軍人・軍属へは50兆とも60兆とも言われる国費が補償として支払われてきました。しかし、50万人とも言われる大空襲の被害者には、「被爆者援護法」を除き、まったく補償されないまま現在にいたっていることを知りました。東京と大阪では大空襲の補償を求めて裁判がおこなわれましたが、東京も大阪も最高裁で敗訴が確定しています。その大阪大空襲訴訟団の元代表の方から、これまでの労苦をお聞きました。現在、国会では超党派の議員によって「空襲被害補償法案」が審議されています。72年前の大空襲は今も解決されていない問題です。

また、毎日新聞社論説委員の方からは、大空襲のお話や取材のイロハをお聞きしました。そして今回の取材は、たくさんさんのテレビ新聞メディアから報道をいただき、それがきっかけで空襲体験者と出会い、取材が深まったこともありました。

空襲体験者はご高齢となり、直接お話をうかがえる時は長くありません。戦争の現実に関心を持って、直接取材することは大きな学びになり、戦争から今の平和を考えることにもつながりました。

大空襲の記憶を、私たち若い世代からもしっかりと伝え続けていきたいと思います。



「堺市戦災無縁地蔵尊」毎年7月9日に慰霊祭が行われます。



「三国丘高校旧三丘会館」（登録有形文化財）1階には戦時下の軍事教練の写真などが展示されている本校の資料室になっています。写真はエンディングの収録風景です。

学校活動部門選評

國學院大學教授 高橋 大助

学校活動部門の選考に際し、その評価ための柱を二つ考えています。一つは、それが伝承文化に関わる学びとなっているか、もう一つは、学校での学びとして相応しいかどうか。当たり前のことですが、この二つの基準を満たすことを求めています。

本年度は、後者に関して若干気になる応募作品がいくつかありました。いま、学校に求められる学び、生徒が主体的に、そして、互いに関わりながら、課題に深く切り込んでいく学びの有り様が見えてこない作品があったのです。一つの課題に集団で取り組みながら、そこに協働の学びが見えないもの、生徒自身が課題の探求を通じて何を得たのか判然としないもの、いただいた作品の中にはそうしたものがありませんでした。限られた字数や方法では活動全体を表現することなどできないかもしれませんが、入選となる作品からは、生徒の学ぶ姿が明瞭に見えてきます。

「為朝外伝～東峰村で発見した母の墓～」としてまとめられた福岡県立朝倉高等学校の活動は、実は、このタイトルの内容としては充分ではない。消えかかっていた伝承を再発見し、墓の存在を突き止め、さあこれから、というところで、村を襲った未曾有の災害が、生徒たちの探求を阻んでしまったのです。為朝伝承の探求はそこで途切れます。しかし、彼らの地域への関心、探求という行為への好奇心は、大きく羽ばたきました。途切れたことで、地域にあることの自覚と探求することの意欲が育まれ、この活動は彼らの明日を形作る忘れられない学びとなったのです。

「堺大空襲とは」(大阪府立三国丘高等学校)は、その映像の出来が素晴らしく、なんとなく知識としては知っていた「戦争」を、証言者の言葉や痕跡からリアルに体感していく生徒たちの姿を見ることができました。この活動を通じて、戦争の事実を知った彼らは、戦争に至る理由はいくらでもあるが、それを肯定する理由はどこにもないということを実感したように思われます。地域の記憶に触れ、そこで得た叡智が、社会の形成者たらしめる意欲を育む。学校活動として地域の伝承文化に学ぶ、一つの典型をここに見ることができるでしょう。

学校活動部門選評

國學院大學准教授 飯倉 義之

伝承文化とは何か。学校活動とは何か。「地域の伝承文化に学ぶ」という、民俗学的国文学研究の伝統のある國學院大學ならではのコンテストにおいて、「学校活動部門」というカテゴリは、少しく出遅れている感が否めない。地域において伝承されてきた文化を調べてその意義を考える「地域文化研究部門(団体/個人)」と、地域に伝えられてきた民間説話、いわゆる民話を改めて取り上げてその文化的な意義を探る「地域民話研究部門(団体/個人)」に対して、「学校活動部門」はその目指すところの提示が明確ではなかったのかもしれない。選定の過程で、選者としてそのような反省があった。

優秀賞の「為朝外伝～東峰村で発見した母の墓～」(福岡・朝倉高等学校)は古記録にある、豪勇無双で特に剛弓の達人として知られた平安末期の超人的な——説話伝承上の存在となった——源為朝の母の墓と称される石造物が現存していることを、丹念な現地調査と聞きとりによって突き止めた労作である。その後の九州北部豪雨に起因する災害によって、追跡調査が復旧を待たなければいけなくなった経緯は、応募映像を作ってくれた現役の生徒にはさぞ無念であろうと思うと同時に、次世代にこの解明を繋いでいってほしいという希望を感じさせた。

同じく優秀賞の「堺大空襲とは」(大阪・三国丘高等学校)は、大阪を襲った第二次世界大戦時の堺大空襲の犠牲者を悼む供養の行事が継続している現場から始め、堺大空襲の傷跡を薄れかけている現在の大阪に接続させようとする、高校生ならではの現地調査の鋭さが活きた切り口であった。現地を歩くことで地域の人々との間に作り上げたつながりを、今後活かしていく活動に期待が持てる。

両校の成果を「学校活動分野」から評価した理由は、いずれも地域において見つけた新たな「気付き」を基とする調査活動を、調査に終えることなく、その成果を地域や広い世界への発信につなげていこうとする意欲にあると思う。地域が伝えてきた歴史や文化を「伝承文化」ととらえ、それを高校という地域と連携した団体として受け継ぎ、発信しようとする試みを「伝承文化に学ぶ」「学校活動」ととらえてほしい。今後「学校活動部門」への参加者に、両校の試みを参考にしてほしいと強く思う。

第13回 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト 受賞者一覧

地域文化研究部門【団体】

賞名	高校名	グループ名	作品名
優秀賞	東京都立戸山高等学校	地理歴史部	明治通りの調査
優秀賞	愛知県立杏和高等学校	郷土研究チーム	今年も祖父江の虫送りを追って～杏和高校 4年目の参加～
佳作	岐阜県立益田清風高等学校	社会探究	ふるさとの川の恵み～郷土の宝「益田川」と私たちの暮らし～
佳作	東京・香蘭女学校高等科	諏訪信仰	諏訪信仰について
佳作	徳島県立那賀高等学校	人形浄瑠璃部	人形浄瑠璃公演活動をととして地域の活性化を図るとともに阿波の情勢を研究する
入選	青森県立三本木農業高等学校	生活園芸研究室	十和田むらさきの栽培と紫根染め
入選	神奈川県立秦野曽屋高等学校	日本史研究部	秦野における戸川砥の生産と流通
入選	長野県北部高等学校	湯川 GO!	飯綱町の箱膳を学んで

地域文化研究部門【個人】

賞名	高校名	応募者名	作品名
優秀賞	東京・東京大学教育学部附属中等教育学校	3年 高橋理歩	ダンスで笑顔溢れる地域へ～テーマパークパレードの魅力を地域活性化運動に取り入れる～
優秀賞	愛知県立杏和高等学校	2年 飯田真世	漬物は語る～世界に誇る日本食の起源とは～
佳作	東京・明治学院高等学校	3年 山本明香里	雑司が谷鬼子母神御会式に学ぶ
佳作	東京・大妻多摩高等学校	1年 川嶋みづか	農家について本当に知ってる?～秋田県横手市の農家の生活について～
入選	高崎市立高崎経済大学附属高等学校	2年 小杉恒太	高崎まつりについて～「高崎まつり」とその歴史～
入選	沖縄県立首里高等学校	3年 伊差川彩花	琉球舞踊と組踊
入選	青森・五所川原第一高等学校	1年 成田さくら	けの汁
入選	青森・五所川原第一高等学校	1年 笹山佳乃	せんべい汁
入選	青森・五所川原第一高等学校	1年 片岡和花	青森県民は甘党!?～青森県の「甘い」料理を徹底調査!～

地域民話研究部門【団体】

賞名	高校名	グループ名	作品名
最優秀賞	群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校	パソコン部	日本の心、地域の文化を伝えるために
優秀賞	群馬・高崎商科大学附属高等学校	社会部進学女子2年	佐野の舟橋・佐野の渡しの伝説
優秀賞	群馬・高崎商科大学附属高等学校	文芸部	下小島町の首塚伝承
佳作	岐阜県立益田清風高等学校	地域研究	民話「川上へ流れた仁王さま」の世界

地域民話研究部門【個人】

賞名	高校名	応募者名	作品名
最優秀賞	愛知県立杏和高等学校	2年 坂東壮一郎	川との死闘～与三と人柱観音像にこめられた思い～
優秀賞	東京・和光高等学校	3年 木原愛理	東京・町田市における妖怪伝説
優秀賞	愛知県立時習館高等学校	2年 仲川晴斐	チンチン山考
佳作	愛知県立豊丘高等学校	2年 鈴木彩水	豊川市の昔話
佳作	愛知県立杏和高等学校	2年 蓑島千東	愛知県弥富市「おみよしの松」
入選	青森・五所川原第一高等学校	2年 境倫果	綿絵の姉さま

学校活動部門

賞名	高校名	グループ名	作品名
優秀賞	福岡県立朝倉高等学校	史学部	為朝外伝～東峰村で発見した母の墓～
優秀賞	大阪府立三国丘高等学校	放送研究会	堺大空襲とは

折口信夫賞

高校名	応募者名	作品名
群馬・利根沼田学校組合立利根商業高等学校	パソコン部	日本の心、地域の文化を伝えるために

後 記

第13回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストは、全国各地の高等学校から昨年を上回る709作品のご応募をいただき、無事終了することができました。本誌で紹介した作品はもちろんのこと、応募作品の多くは高校生の皆さんが実際に現地に出向き調査をし、地域の方や専門家から話を聞き、研究を積み重ねて作成された内容の濃いものでした。

インターネットで検索すれば多くの情報を得られる昨今ですが、自分で調べて疑問に思ったことを、足を使って見聞きすることで生の情報に触れ、机上では決して味わえない新たな学びや感動を体験できたのではないのでしょうか。

本コンテストへの参加を通して、日本各地の「伝承文化」に興味を持ち、地域に息づく文化を肌で感じていただけたなら喜ばしい限りです。今後も多くの「伝承文化」に出会えることを楽しみにしております。

最後に、本コンテストにご応募いただいた高校生の皆さん、指導教諭ならびに地域の皆様、そしてご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。



高校生新聞®

第13回（2017年度）

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト入賞作品集

発行日 平成30年3月1日

編集・発行 國學院大學 総合企画部 広報課

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

TEL 03-5466-0130

FAX 03-5466-0528

高校生新聞社

〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10

TEL 042-724-2750

FAX 042-724-2710

≪第14回地域の伝承文化に学ぶコンテストお問い合わせ先≫

高校生新聞社

eメール：contest2018@sclpa.jp